

俳句雑誌

令和六年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七巻第五号

水 明

2024 5月号



《今月のかな女》

大團扇三社祭を煽ぎたつ

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

鎌倉時代の正和元年に神輿を船にのせて隅田川を渡御した船祭を起源とする三社祭。コロナ災禍で三年間中止されていた祭が去年から再開されたが、かなり様変わりしてしまったように感じる。掲句の時代はどのような風情であったのか興味がわくが、大の男が全身を使って煽ぎ立てる巨大な団扇の登場で、筆者が思い描いていた昔ながらの祭の姿が見えてきた。今から四十年ほど前、三社祭の町神輿を担いだ時の苦い経験を思い出した。

(鬼之介・註)

水 明

第1124号

— 華の一句 —

伊勢海老や甲冑まとひ躍り出る

寺内知子

正月の御節料理や祝事の膳には欠かせない伊勢海老である。その名の由来には様々な説があるが、主産地が伊勢であることもその一つ。体長は二〇〜三〇cmで重さ一kg位が標準。漁法は、刺し網漁・潜水漁・蛸簀し漁・流通時の姿（二本の触覚と脚）の保全が大事で、水揚げ後保温すれば一週間ほどは生きている。掲句の赤色緘の甲冑を彷彿させる臨場感の溢れた表現が素晴らしい。

（鬼之介・推薦）

水明

令和6年
5月号

今月のかな女

華の一句

しばざくら(作品)

ピアノ発表会(近詠)

高輪ゲートウェイから(近詠)

百尺竿頭 主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

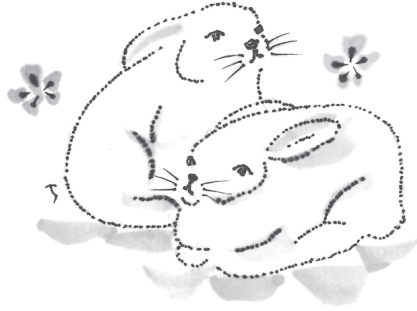
『水明誌』を繙く

六賞発表

令和六年 水明賞
令和六年 季音賞
令和六年 かな女賞
令和六年 鼓笛賞
令和六年 新珠賞
令和六年 山紫賞
審査経過
受賞のことは

加藤絵里子

石井喜恵 大橋廸代	石山かつ子 ほか
梅澤佐江 森川義子	井上燈女 ほか
曲淵徹雄 野田静香	河野はるみ ほか



新珠賞審査経過

新季音同人発表

四月号の巻頭句

現代俳句鑑賞

俳誌望見

句集喝采

水明集

菅原卓郎
菅原真理

新 曆文
ほか

水明集作品評

水琴窟 (水明集三月号鑑賞)

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

山紫集

円卓の会吟行の記

春の吟行会の記

水明例会報・各地句会報

水明全国大会のお知らせ

風声・発展基金御礼

後記

網野月を
染谷風子
曲淵徹雄

山本鬼之介

池田雅夫

92

101 100 95 90 89 83 80 78 74 62 61 60 58 57

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

しばざくら

山本鬼之介

艦長の袖の金筋風光る

野に遊びつくして替はる影の向き

船名の「丸」の謂れよ春の濤

慎ましく句碑を浮かせり芝桜
小庇やむかし語りの櫻餅
春の野に兎を招く亀の首
一輪草がいちりん草に寄り添ひぬ
地に指のとどく体操別れ霜

ピアノ発表会

島津初花

春浅し野に一点の黄のひかり
つくづくし幼児の両手を零れけり
大ホールに春着のキッズコンサート
発表会飛び出す幼児に春の曲
小さき指に弾むリズムや春のうた
エレクトーン響く春禽樹を揺らし
春浅しふはりドレスの女の子

三月に入っても寒く、明るい陽の訪れを待ちながら、時の流れの早さに思いを馳せると、東日本震災から十三年。同じ日、夫の十三回忌の日のことである。

我が家の曾孫男の子二人が習っているピアノ教室の発表会が、町のバレア音楽ホールで行われた。

初めて向うグランドピアノに演奏曲二曲を見事に弾いた五歳児。その後の「礼」をすっかり忘れ退場したが、笑いと拍手の御負けが頂けて良かった。長男は三年目の経験なので、落付いて強弱も付け堂々としていた。充実した一日が過ぎ、家族団欒、食事の終わった夜は、一年後のことを考えて床に付いた。

高輪ゲートウェイから

境

延昭

春日燦ゲートウェイに駅ピアノ
名苑に新婦がポーズうらけし
倒木は朽つるにまかせ木の芽風
春の水日差しの中に鷺一羽
隠沼へつづく土塁や藪椿
春昼の門前で食ふ鴨南蛮
梅園の数寄屋に錠のにじり口

三年前開設の新駅、高輪ゲートウェイに降り、明治学園を経て五反田へと歩く。途中、八芳園と科学博物館付属の自然植物園で遊ぶ。旗本彦左衛門の屋敷であった回遊式の名園、八芳園は日和が良いのか園のあちこちにカメラ陣を引き連れた新郎新婦が溢れていた。

自然植物園は室町の白金長者の館跡、六万坪の野趣の自然林、五十年ほど昔に来た時そのままであった。翌日、吟行の足を池上本門寺へと延ばした。新婚の頃の通勤線、池上線はワンマンカーに変っていた。真直ぐに歩けぬ足での散策で靴擦れが土産となった。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

二月号

門の一途な構へ 去年今年

「門かんにめき」とは門の扉が開かないようにする横木のこと。「貫かんの木」からの音変化と言われるが、字形を見ると横木が門の両扉を貫いていることがよくわかる。門の掛った門扉は堅固で、まさに「一途な構へ」を感じさせる佇まいと言える。高浜虚子の名句「去年今年貫く棒の如きもの」を連想させる一句である。

襲名の 楽屋暖簾に淑気充つ

楽屋暖簾は歌舞伎や能楽、落語などの楽屋の入口にかけられる暖簾で、鼠肩筋から敬意をこめて贈られる。折しも三百年以上続く歌舞伎の大名跡、十三代目市川團十郎白猿の襲名披露は二〇二二年十一月から二年間に及ぶが、新春の披露興行ともなれば、真新しい楽屋暖簾には新年を寿ぐめでたい淑気が充ち満ちていることだろう。

持ち歌は未だ「王将」新年会

「王将」は一九六一年十一月にリリースされた村田英雄の

ヒット曲で、最終売り上げが三〇〇万枚を超え爆発的な人気となった。「吹けば飛ぶよな将棋の駒に」の歌詞に哀愁を感じるオールドファンも多いが、最近では藤井聡太棋士の活躍で新たな注目も集まっている。NHK紅白歌合戦で四回歌唱されたこの歌を十八番に新年会も大盛況だ。

冬うららお江戸であらば抜け参り

江戸時代には伊勢神宮への参拝が善業とされ、親や主人の許しを受けないで家を抜け出し伊勢参りに行く「抜け参り」が世間的に容認され、これを積極的に手助けする風潮があったという。春のようにおだやかで明るい冬晴の一日、江戸の世であれば白衣に菅笠の巡礼姿で「おかげでさ、ぬけたとさ」と囃しながら伊勢参りにでも出掛けたものを……。

歩兵聯隊跡に情趣を冬櫻

赤坂九丁目に位置する東京ミッドタウンは、東京を代表する複合施設として連日の賑わいを見せている。この地は江戸時代の萩藩毛利家屋敷跡であるが、明治七年から陸軍の駐屯地となり終戦まで陸軍の歩兵第一、第三聯隊が置かれた。域内には旧防衛庁時代からの桜通りがあり、ソメイヨシノに先

立つ冬桜が往時を偲ぶ縁よすがとなつてゐる。

三月号

立春大吉頼もしきかな實母散

立春は旧暦での一年の始まり、左右対称で縁起の良い「立春大吉」のお札を貼り平穏と無事を祈るのが慣わしである。春と言つてもまだ寒い日が続くが、そんな時に頼もしい味方となるのが伝統的な生薬湯「實母散」だ。もともとは婦人の産前産後の妙薬として流布した煎じ薬だがその後入浴剤に転用され、温浴効果を高め、血行を促進し、諸症状を緩和する浴剤として銭湯や家庭で根強い人気を誇つてゐる。

玉砕のことばの重み建国日

「玉砕」は玉が美しく砕け散るように名誉や忠義を守つて潔く死ぬこと。第二次世界大戦において日本軍が勝機がないにもかかわらず降伏を拒み、部隊が全滅するまで戦い続けたり、集団自決したことを指す。二月十一日が戦前の紀元節にあたることから今だに議論がかまびすしい「建国記念の日」にあたり、制定の趣旨である「建国をしのび、国を愛する心を養ふ」ことの意味を改めて問いかける一句だ。

淡雪に雪見灯籠整ひぬ

雪見灯籠は主に庭園や池に用いられる石造りの灯籠で、比較的小型で高さも低く、狭いスペースでも設置できるため一

般家庭や店舗でも愛用されている。名前の由来は琵琶湖屈指の景勝地「浮御堂」が有力。池のほとりに設置した灯籠を浮御堂に見立て、「うきみ」が「ゆきみ」に転訛し雪見灯籠になったと云う。その灯籠に淡雪が積もればまさに絶景、連想は「堅田落雁」から「比良暮雪」へと広がつてゆく。

ダンディに客員教授春の芝

客員教授とは、大学や研究機関からのオファーをうけて教授に就任している人のことで、非常勤で一定の任期が定められている。大学の宣伝を兼ねて招かれることが多く、有名人や文化人などが就任して大学の知名度向上に一役買うケースもある。ダンディな服装に身を包んだ客員教授が講演を終えて教室を出るや、ファンの女子学生に囲まれて質問攻めにあふこともしばしば。キャンパスの芝の芽吹きが目には快い。

銅像の人馬もろとも冴返る

甲冑をまとい騎馬を駆る孤高の武将、誰もが「カッコイイ！」と認める男の中の男の姿だが、そんな雄姿をリアルに表現したのが、日本各地で見得を切る騎馬像である。楠木正成像（千代田区）、伊達政宗公騎馬像（仙台市）、山内一豊像（高知市）、井伊直政公像（彦根市）、最上義光騎馬像（山形市）、前田利家像（金沢市）、那須与一像（大田原市）、武田信玄と上杉謙信の一騎打ちの像（長野市）……。時ならぬ寒さに人馬もろとも冴返つたのは誰やらん。

ゆずり葉

◆季音二月

檜 鼻 ことは

指立てて風よむ漁師寒日和

石山かつ子

何時のことでしたか、手漕ぎの小舟で沖に出ようとしていた時、時化になるから戻れと漁師さんが大きな声で教えてくれたことがあります。そして、その通りになったのでした。最近では天気の情報を経々なメディアを通じて知ることができるとなりましたが、漁師はそれに加え、天候の変化を見極める知恵をもっているのです。

冬晴の日、指を立てて風よむ漁師の姿、何とも絵になる光景ではありませんか。耳学問によりますと、指を舐めて大気に晒すと風のあたっている面が冷たくなるので風向きがわかるのだそうです。風向きがわかれば、代々語り継がれる経験則として、その風土に根付いた天気予報ができるのです。寒晴の浜に立つ熟練の漁師の姿が何とも渋く、声にしよう。寒晴の浜に立つ熟練の漁師の姿が何とも渋く、声にしよう。読んだ時、凜とした響きがとても心地よい一句です。

数独であそぶ白寿や福寿草

大橋 廸代

数独もしくはナンプレと呼ばれる数字パズル。「九×九の正方形の枠内の空いているマスに一から九までの数字を入れる。ただし、縦・横の各列に、同じ数字が重複して入っていない」というとても単純なルールなのですが、これがなかなか難しいのです。パズルは初級編から上級編まであり、初級編でもいざやってみると、私の場合など、一〜二時間ばかりかかってしまうのです。それだけに、ああでもないこうでもないという試行錯誤しながら、パズルを完成させたときは、達成感に浸ることができます。数独を楽しめる白寿、お元気なことです。きっと他にもいろいろなことに興味関心を持ちつつ日々を過ごしていってほしいと推察します。

朝寒や小指ぶつける椅子の足

町野 広子

大いに身に覚えがあります。ついつい足の指を小椅子や何かにつけてしまうことがあります。どういうわけか、寒い時期につけると、これがもうとてつもなく痛くて、唸っ

てしまうのです。掲句は冬も近くなつた朝冷えの台所でしようか。「あ、痛つ」と顔をしかめていらつしやる光景が目に見えてくるようで、とても臨場感があります。それにしても、寒い時は、何故あかも痛く感じるのだろうと調べてみましたが、痛覚というのは人の身体の安全を保つ大事なセンサーで、気温が下がると他のセンサーの働きは鈍るのですが、痛覚センサーだけは正常に働いていて、その分、いつもより多めに痛いという情報を伝えるのだということでした。

過ぎし事みな透明に雑煮食ふ 大塚茂子

「過去を振り返るのではなく未来を見ようとするのではなく、今があるがままに受け入れ丁寧に今に向き合うことが大事です」と言うような話を曹洞宗の僧侶からお伺いしたことがあります。

「過ぎし事みな透明に」の措辞に触れ、ふとそのことを思い出しました。今は時間の中にあるのではなく、時間は今の中にある。この今を大切にして日々を過ごすには、「ながら」ではなく、ひとつひとつのことを大切にして生活していくことが大切なのだと言うお話でした。

どんなに生活様式が変化しても、元旦の朝に欠かすことの出来ない雑煮です。気持ちを更新たにし、今年一年、丁寧に日々を過ごしていこうとする詠者の気持ちを感じました。

着膨れて星と語るや明日のこと 宮崎チアキ

オリオン座。ペテルギウス、シリウス、プロキオンで結ぶ冬の大三角形など、天体マニアでなくてもいつまでも見ていたくなるほどに冬の夜空は美しく、冷気の中、星たちは綺麗に輝いています。何かしら心配事があったり、悩みごとがあったりした時、そんな夜空を眺めていると、心が浄化されたような気持になる、そのような経験をお持ちの方もあってはいませんか。掲句の場合は、美しい冬の夜空を楽しんでいらつしやっただけなのかもしれないし、どうなのかはわかりませんが、「着膨れて」という生活感のある季語が、「星と語るや明日のこと」という措辞に現実感をもたらしていて、心にすつと入ってきた一句です。

若人の食へ歩く町クリスマス 田中章嘉

二千二十二年度の時点で十代から二十代の若者たちをZ世代と呼ぶそうですが、このZ世代の若者たちは、家族を中心に気心の知れた人と共にクリスマスを過ごす人が多い傾向にあるのだそうです。それでも、クリスマスシーズンともなると、テレビなどでは、イルミネーションに飾られた通りを賑わす若者たち、渋谷の雑踏でたむろする若者たちの姿を風物詩のように放映しています。

ひよつとして、クリスマスの日を、都会の雑踏の中で過ごす若者たちは、本当は孤独なのかもしれません。

季
音
雪



鎮
魂
石
井
喜
恵

手を貸して渡る吊橋雪解風
枯大樹空に迷路を画くごと
初音聞くほかに音なき奥の院
鎮魂の波ゆるやかに春の海
海苔舟の能登を遠見や片男波

恋の歌碑
石山かつ子

はてしなき空ある限り揚雲雀
音もなくかがい耀歌の山の名残雪
春雨や大寺にある恋の歌碑
本題は言はず紅梅見て帰る
牧開き男体山は日本晴

春 雷 大橋 廸代

二人連れ 小倉 倭子

春雷や阿修羅は眉間ひき締むる
百千鳥厨子の飛天は細身なり
星おぼろ赫赫迅き宇宙船
剪定や紺の法被の勢揃ひ
起重機の庭師美男や花を伐る

別所沼日永の影の二人連れ
来世でも水明俳句花の影
振り返る句道に帰心いぬふぐり
いぬふぐり星屑咲かす野辺を行く
忘却とは寂しき想ひ三月十日

春 深 し 大村 節代

梅 栢尾 さく子

いざ鎌倉野太き声す春の海
八幡宮に善男善女桜餅
婆スキップ春雨なんぞ何のその
春雷や空を見上ぐる袋熊
見えぬ物見するダリの絵はる深し

冬ざれの山にめり込む檜皮葺
鍋底で震へる蛍いかの脚
花見酒いや雪見酒と春せはし
陽が射して面目躍如陽光ざくら
白梅の気品紅梅の愛嬌梅見茶屋の昼

陽 炎 菊池ひろこ

陽炎や画集抜け出す魚の骨
栄螺住む外海かこむ岩山よ
陽炎もときに足枷乳母車
晩学や寝るも醒むるも春炬燵
隣室を納戸がはりに春炬燵

大 八 州 五 明 昇

鯉こくに余寒を解く峡の宿
生国を信濃と発し春炬燵
三月や別れを急かす発車ベル
木曾節を流す日永の蕎麦処
大八州浮かべ揺蕩ふ春の海

山 山 に 境 延 昭

山山に砦の跡や山笑ふ
呪ひのごと朝餉の海苔を一焙り
ビル街の空は細切れ別れ雪
小半を下地に銀座春の月
信条をいのちの限り種浸す

火 遊 び 椎 野 美 代 子

火遊びの火の粉が髪に春の闇
裏階段一段づつの春の闇
春の闇幻想俳句生き生きす
人慕ふ気怠さここに春の闇
一灯の如き遺影や春の闇

春 暁 島津初花

春の水光を乗せて鶉の瀬川
春暁やインクの匂ふ新聞受く
うぬぼれの水仙頬を脹らませ
稚児の熱春暁に過るかな
春暁や光の届く池の鯉

春 炬燵 鈴木康世

春炬燵常と変らず茶菓のあり
富士眺め父母の話春炬燵
春炬燵母の詩吟を聴く姉妹
幾人の喜怒哀楽を春炬燵
幼らの眠る母家の春炬燵

潮 の 色 田寺玲子

鳥雲に刻々変はる潮の色
風あらた須磨の御禊の波あらぶ
海霞む波裂きて航く連絡船
甲板の弾む靴音風光る
陳列は一刀彫の立雛

子 猫 十倉和子

董濃し平城宮のそこかしこ
巡業幟立てば総立ちつくしんぼ
鬚いまだ結へぬ力士に子猫蹤く
発掘の現地講座へ初燕
余呉の湖はなれがたしと残る鴨

蒼解ける 鳥羽和風

お彼岸 波多野寿子

春暁や稜線 仄と村包む
春暁の始発列車へ拡声器
靖國の蒼解けて春を告ぐ
庭石が婿なら嫁は濃山吹
鞆に 残して帰る 鏝の音

ぼた餅は母の好物彼岸入り
眞つ白な僧の鼻緒やお中日
お彼岸の僧の読経の部屋に満つ
彼岸僧白寿の吾れを上げましぬ
友逝くや淋しさ募る彼岸寒

朧 永野史代

未来に 星野和葉

嫋やかに灯台を抱く春の海
ほろ苦き思ひ出母の花菜漬
蛇口より水音のあり朧の夜
触れさうで触れぬ手と手の朧かな
朧かな女の貌はのつぺらぼう

別れより未来に向かふ卒業歌
少女走る闇雲に行く春の浜
牧開き逸る駿馬の尻光る
そぞろ行く門前町を夕朧
月朧待ち居る人に歩を強む

花の頃 茂木和子

三月 矢作水尾

昇り竜の形の日の本花便り
今日五輪咲きて我が家の開花宣言
やがて夜の景色に溶くる春の雨
代る代る抱かるる赤子桜餅
再会を約す握手や鳥雲に

光り合ふ春三月の波がしら
ふるさとの野の色届く鶯餅
薄氷に寄する小波限りなく
天井の裸婦めくしみや春の雷
春雨や大僧正の赤き傘

一粒万倍日 森本早苗

花見船 山中みどり

架け橋も神話の島も春霞
春麗かかり付け医に褒めらるる
財布おろす弥生一粒万倍日
絵手紙の地蔵の笑まひ桃の花
楚々と生きよと道の辺の董草

墨堤に舳先を揃へ花見船
花筵墨堤に古き舟灯籠
つちふるや草原情歌馬頭琴
二胡で聴く馬の啼き黄砂ふる
健やかに古い草餅の緑色

淡き空 柚木治子

大倉山梅園界限 網野月を

春場所を仕切る行司の水浅葱
着物姿の母のあとさき卒業子
山笑ふ風よみて干す草木染
風呂敷の似合ふ女や桜餅
女君の声たをやかに月朧

枝ぶりを見せて満開梅の花
雨ごとに馬酔木明りを誘きだす
陽の無心青木の花芽照らしけり
海苔弁の海苔に舞ひ散る梅の花
日を浴びて風誘ひ出す春の土

一夜草 由良 ゆら女

春愁をのばして首のストレッチ
菜の花や世の行く方を左見右見
いつの間に座敷童が雛の客
独り住むことの贅沢 一夜草
孕み鹿老いの起ち居に似て愛し

☆

☆

季音月

春の雷

梅澤佐江

翻車魚の恋は泡沫西行忌
訪ふや雪の別れの銀閣寺
春ともし唐三彩の馬の艶
「命ある限り」と誓ふ春の婚
春雷や愛の名残のごと幽か

春の泥

井上燈女

菜の花や夕日の中の車椅子
菜の花摘む大地の色に手を染めて
春泥や土の香の染む農衣干す
忘れ霜後継者なき田の広さ
地下足袋の乾きつつ反る春の泥

春の雷

森川義子

突として鳴る春雷のそれつきり
てつぺんに春の昼ある観覧車
丸髻の祖母の遺影や春灯
瀬戸内は光の海よ春の風
逍遙のいつもの野路の雪の果

龍天に昇る

池田雅夫

龍天に昇る古城にかかる雲
春の灯や徘徊猫の三つ巴
古草や根性論の今はむかし
夕月に寄り添ふ星の朧かな
古民家の太き梁うづばり古巢かな

春の浜

高島寛治

足跡は幼児と小犬春の浜
春光や波止に連なる干物売り
泣く程の訳は無きまま卒業す
沈黙のアンモナイトにある余寒
海苔干すや海風くねる路地裏に

牧 開 内田 恵子

静止する絡繰人形余寒かな
余寒なほずんぐりむつくり農耕馬
さらきらと馬と少年牧開
牧開く海を見下ろす馬の群
鳥影の遠く近くに春の海

春 炬 燵 大場 順子

丹の腕に手鞠麩浮かせ雛の日
春光や丹の色美しき柿右衛門
鼻の差でゴールの駿馬陽炎へる
欄干を火の玉駆くるお水取
手の届く場所に歳時記春炬燵

山 辛 夷 松宮 保人

浅春やレッスんらしきピアノ音
惜別の感一入や卒業歌
味噌加減程よき母の蜆汁
忌明けの経流るるや山辛夷
春暁や孟浩然を口遊む

余 寒 松井 由紀子

旅終へて余寒の居間の灯を点す
泣きに行くつもり余寒の映画館
聴き惚れし音まとひ出る街余寒
影法師あまた余寒の交差点
ビル陰に放置自転車ある余寒

桜 餅 丸山 マスミ

蕉翁と関越ゆる夢春炬燵
一人旅洛北の夜の花菜漬
海苔笹の波間揺蕩ふ夕明り
大仏を眠りに誘ふ春の海
桜餅本郷菊坂鑑坂

微 睡 正木 萬蝶

淡雪や曇り硝子と白底翳
春炬燵予後よき君の薄化粧
微睡の二人は若し春炬燵
春炬燵不老の夢を貪りぬ
味はひの踏絵残りし島の魚

カセツト 町野 広子

実家解体広縁に座し日向ほこ
朧夜のカセツトで聞く青江三奈
朧夜や古墳と覚しき小山あり
佳き声の齒科助手ミモザ咲き溢る
花菜漬盃交し合ふ義父と父

草 餅 上戸 千津子

草餅に鳥唄かすか波の音
春風や何か聞こゆる古城跡
河津桜に堤回廊唄声も
還暦は過ぎたに雛幼な顔
生在らば来年逢はむ雛納め

春日輻射 渡辺 舍人

立春の体温計のピピピピ
山彦にのぞかれてゐて雛祭
石鹼玉セツト洗面所に睡る
春日輻射傘を逆さに干して置く
春の雨泣きたいならば大泣きせよ

春の宵 藤澤 喜久

春の宵くちざみせんの端唄かな
「あれそれ」の通る旧友月朧
春疾風家のテレビに「徹子の部屋」
面倒は老いの禁句よ花時雨
暖かき吉祥日の写真館

坊泊り 荒井 俱子

三月や挽ぎ取られたる金釦
美少女のやうな男の子や牡丹の芽
牡丹の芽尼がもてなす茶懐石
坊泊り独活の酢味噌と般若湯
般若湯酌むや涅槃の坊泊り

花 菫 川崎 道子

畳廊下に衣擦れの音春の宵
芽柳や約束の人現れず
つちふるや明治の写真セピア色
菫咲く小町の井戸のかたはらに
女系家族鉢いっぱいの花菫

花の下 山田美佐尾

流鏑馬の的射る男花の下
去りぎはの挨拶なるや雁の鳴く
三月や引き越荷物山となり
春雷や胸元に手をペンダント
山路来て春雷に会ふ薄煙

利根明り 松本光子

尼寺の屋根の高さよ春の川
花菜漬煮豆も買うて鳥越町
芽柳や水音機音城下町
利根明り夕べむらさき波がしら
鶯に藪のふくらむ日暮かな

雪の果 近藤徹平

雪の果入江の奥に津浪の碑
初初しき寿限無寿限無や寄席は春
名残の雪亡き友しのび「北帰行」
裏方へ座頭くばる桜餅
春祭黄の声浴ぶる若頭

春の雷 井上玲子

満身に草の息吹を野に遊ぶ
安曇野を潤し過る春の雷
晩年の心ゆさぶる春の雷
余寒なほ洪鐘わたる嵯峨野かな
洪鐘の余韻余寒の中に散る

花 大塚茂子

駄ピアノ詰襟で弾く卒業生
里山や瀬音に和して囀れり
囀や御足参りの長谷寺に
花の雲独歩の句碑の桜橋
橋の下一夜舫ふや花筏

藪椿 西浦千枝子

世界遺産の大師の山や春の雪
村はづれの祠朽ちたり藪椿
散りてなほ色失はぬ紅椿
登校の声弾む道菫咲く
咲く色を思ひ浮かべつ菊根分

末つ子 野口和子

末つ子はつと末つ子 薑草
辛夷咲き 鯛焼並ぶ 経木かな
単線の電車 間遠し 春時雨
めくり癖付きし 歳時記 草萌ゆる
銀色の狐の尻かな 猫柳

母子草 松山清子

ひつそりと命 蠢く 蝌蚪の紐
磴百段 風に晒されたる 雛
突如廻る 水子地蔵の 風車
父失くし 医学部めざす 母子草
海牛を突きたくなる 磯遊び

うすもいろ 福田千春

テレビには 戦車卓には さくら草
はにかみの少女の ほつぺ 桜草
駅中の 弁当屋にも 春溢れ
居酒屋の 魚拓くすみて 春夕べ
濁目は 憂さを見ぬため 朧かな

鐘おぼろ 熊倉千重子

下萌や 足裏に 響く 地の鼓動
野に遊び 箸が 燥ぐよ パーベキュー
野遊びや トラランペットの 途切れがち
春場所や 力士 眩しき 土俵入
鐘朧そろそろ 暮るる 蔵の町

☆ ☆

季音花

梅見 曲淵徹雄

浮雲へ向かひ澄ふむ実朝忌
陶然と舐むる生傷浮かれ猫
春浅し天地返しを待つ畑
ここまでが梅見の道といふ高み
白梅の白極めたる山の陰

三月の風色 河野はるみ

坂道へ魚鼓の音散らす春の風
学童とたんぽぽ並ぶ朝の道
青空と母子の笑顔春三月
三月やピンクの旗の多き街
散歩道色みせ初むる仏の座

頬杖 野田静香

春昼の頬杖に風カフエテラス
柳の芽ときめき誘ふ風みどり
清明や雨詩的なる哲学堂
丸窓に紅白の梅茶を点つる
春疾風円陣を組む草野球

春暁 飛永鼓

農具小屋は整然として春光
少年を送る声援春の川
蟠りのとけて流るる春の川
春暁の夢の続きを引き戻す
春暁の山はふつくら微睡みぬ

菜の花 原田秀子

轉りに暫し宿貸す上枝かな
卒業日白衣の染みもなつかしく
濃紺の袴きりりと卒業す
ゴッホにも負けぬ菜の花畑かな
彩りを愛づる花菜のゆで加減

青き踏む 石川理恵

立ち詰めの官女ねぎらひ雛納
啓蟄や遺跡発掘見学会
地続きに祖父母の家や初桜
山吹や平家伝説残る谷
それぞれの道それぞれに青き踏む

光明 青木鶴城

春めくや鳥獣戯画の動き出す
せせらぎに動かぬ水車露の臺
光明の宿る笑顔や実千両
香煙をたつぷり纏ふ春深し
衰へは衆生の定め涅槃西風

上野界限 日高道を

隣席は上野小町や春テラス
往來は静か二月の広小路
永き日や婦人画報の美食記事
足占にて恋のことなど朧めく
花を待つ人それぞれの上野山

小径 檜鼻ことは

薄氷の下になにやら動くもの
アトリエは小径の向かう花ミモザ
弔問を終へて堇の咲く小径
木の芽時あなただけへと言ふ知らせ
これ以下は何も言ふまい蜷汁

掘行く舟 保坂翔太

御手玉は祖母の手づから春炬燵
畦道や郷土の春をうたがはず
春耕や今年限りと畝立つる
ゆつたりと掘行く舟や城の春
半玉の左右の笑窪春の夜半

陽炎 笹本啓子

朝東風や絡み会ひたる舫ひ船
強東風や水切石の五段切り
連結音残して貨車の陽炎へり
陽炎のばんばの中を撒水車
春灯や杖を納むる結願寺

光の帯 横山君夫

陽炎に杭打つてゐる測量士
農を継ぐ誇りを胸に卒業歌
猫柳川は光の帯となり
欄干の端に弾痕や蝶止まる
鯉の尾の雲を散らせり水温む

般若湯 染谷風子

観梅の宴に一句を掠り筆
山峡にも焼く煙春浅し
裸体画にハレムの匂ひ三鬼の忌
逆浪に揺るる小舟や実朝忌
のどけしや庫裏に大黒般若湯

雪の果て 渋谷きいち

春泥や楽屋に鼻緒切れたる下駄
女下駄ぶらさげ帰る春の泥
月は東に置いてけぼりや鳥帰る
三角を円く収めて茨の芽
雪の果吾は八十路の大博奕

籠の夜 鈴木玲子

黒千代香のまろき味知る籠の夜
籠かないつも上座に父の影
坊津の湾うねうねと籠かな
城壁の声聞こゆるやうな月籠
水引の和飾りゆかし桜草

おのおの春 石田慶子

手招きの先にひつそり春炬燵
小魚をさつとあぶつて海苔茶漬
春の雨街に自慢のアップルパイ
旅立ちの君に押し花桜草
卒業の挨拶角の交番へ

春シヨール 宮崎チアキ

リハビリの助言嬉しや蒲公英野
雪の果朝日に跳ぬる小枝かな
峠茶屋ほんのり香る桜餅
打ち捨てて無心の湯浴み忘れ雪
赴任先の夫に駆け寄る春シヨール

漆黒の城 野村美子

奥入瀬の名残の雪や川の音
聳え立つ漆黒の城梅日和
裂織の半巾帯で梅見かな
夕東風や島の灯台点る頃
朝獲れを千倉の宿の焼柴螺

東風 野平美紗子

合格の便りと共に東風吹けり
強東風や主なき庭を荒しゆく
けふ開花郵便局の朝桜
壺焼の柴螺寄り添ふ皿の上
母は大正生れの寡婦や春彼岸

湘南の春 下川光子

マリーナを過ぎて若布の海展く
若布刈すこし欠けたる烏帽子岩
エプロンに潮ぼたぼたと干す若布
白子舟上げてドジャースユニフォーム
無鉄砲は親ゆづりなり浅草海苔

卒業す 田中章嘉

傷深き能登を残して卒業す
下駄箱に名前残して卒業す
また還る希望を抱き卒業す
少しづつ春を迎ふる能登の人
草木も地震に負けずに芽生えくる

金次郎 松島寛久

婆の背の子も頬かぶり寺の道
ラグビーや女は強し太き股
第一ボタン取られて吾子が卒業す
水切りの石が遠くへ卒業す
頬かぶりさせたや星夜の金次郎

戦は山吹鉄砲で 瀬戸雄二郎

山吹は枯れずほろほろ散りて行く
山吹の故郷は武州越生とか
山吹の群れ咲く里や人氣無し
山吹や水場へ続く獣道
山吹咲く戦は山吹鉄砲で

風光る 葛城 千世子

御八つまづ写しラインを雛あられ
独りきり腓返りの花の冷え
夫婦して予後の散歩や花重
春休み返信封筒入り届く
風光るあまたのラインにうんざりす

好文木 高橋 満耶子

円空仏の密かなる笑み好文木
「カイロス」は五秒で自爆春の空
老鳥は居眠りばかり春霞
左利きは父親ゆづり花重
一年中制服着ずに新学期

☆

☆

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2024年6月号

特集 消えゆく梅雨？
〜環境問題と俳句

- 水の問題を考える「水文学」とは何か
沖大幹 (水文学者)
- フェノロジストとしての俳人
マクマレイ・デビッド
- 俳句からみる環境問題 **坪内稔典**
- 作句の現場で感じる環境問題
伊藤浩子 **マブソン青眼** **小杉伸一** **路千々和恵美子** **国枝隆生** **安里航太**
- クラシク **俳句界NOW** **奥坂まや**
- 特別作品21句 **今瀬剛一** (対岸)
- 特集 **俳人よ、一匹狼になれ**
折井紀衣 **花尻万博** **関悦史**
佐藤文香 **若杉朋哉** **松本葉夏**
- 【注目の句集】 **淵脇護** 『**鷹柱**』
- ★セレクトシヨウ結社「しろはえ」 **佐々木潤子**
- 私の一冊 **阿部王一** 『**水輪**』
- 「俳句界」投稿欄 一流置者11名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性がございます。

株式会社 **文學の森** お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL. 03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

『水明誌』を繙く（水明三月号）

加藤絵里子（「山河」・同人）

寒波来て軋む身内の蝶番 森川義子

金平糖の王女に産毛聖夜劇 森下山菜

「身内の蝶番」に真つ先に惹かれた。「寒波来て軋む」まではずつと読み通せるのだが、「身内の蝶番」まで来て、少し止まって考える。このたとえは、深いなと。

「軋む」のが「身内」だとすれば、体内の或いは心の何かが「蝶番」のように、柔軟な動きを手伝う。体が在って初めて「蝶番」があるし、同時に全身は「蝶番」の機能で保っているというように、「軋む身内」と「蝶番」とが補完係にあると、解釈できる。しかしもし「軋む」のが「蝶番」であれば、寒波によって身も心も柔軟性を失い、ぎこちない蝶番のような心地だと読める。あるいはその様子を、凍蝶のイメージに重ねあわせているのかもしれない。ぎこちないと、自分で不甲斐なく感じてしまうものだが、「蝶番」あるいは凍蝶のイメージという別の例えを持つてくることよって、句にゆとりが出る。冬の寒さに感傷的にならず、例える余裕があるのだと、読者も安心する。

一つの句で、大まかにはその二通りの読み方ができる。そんな句、なかなか出会えない。

「くるみ割り人形」の筋書きは夢のよう。甘くて丸っこいフォルムが可愛らしい、お菓子の金平糖にちなんので、音楽もバレリーナの踊りも可憐である。そんな劇中の妖精、あるいはバレリーナの動きではなく、なんと「産毛」にズームイン。夢に包まれた心地から、現実感と生命感にぐつと引き寄せられる。その現実感や生命感、命の誕生への歓喜や感動。

しかし下五「聖夜劇」を考えると、美しいバレリーナに産毛があるという、可愛らしさ滑稽さにとどまらず、解釈が変わる。「くるみ割り人形」はクリスマスマス話であり、西洋ではその観劇がクリスマスマスの過ごし方でもあるから、季語のあて方はぴたり。下五から少し戻って考えると、イエスの「産毛」もイメージ喚起される。キリスト生誕は喜ばしい出来事だが、「毛」という生々しいものから後の十字架、西洋の原罪思想にまで発想が及ぶ。死を思えば、生そのものへの感謝の念、生のある方の反省が湧き出る。句全体に戻ると、金平糖も人の毛も、柔らかい棘に見えるてくる。

仕掛けが満載の一句。

令和六年

水明賞

梅澤輝翠
越田栄子

令和六年

季音賞

日高道を
青木鶴城
檜鼻ことは

山本鬼之介

審査経過

◆水明賞◆

令和六年の水明賞は、令和六年三月十一日の水明賞審査委員会において受賞者を決定した。審査委員会では、先ず委員九名から受賞に對する総論を述べ、次に令和五年の水明集巻頭作家を候補者とし、各月の作品の出来映えや順位、更に、十月号での夏季競詠の順位も審査対象として全委員が十分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記二氏の受賞が決定した。受賞者各位は、今年七月号より季音「花」欄の作家として更に研鑽され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層發揮した作品を発表されること期待する。

◆季音賞◆

令和六年の季音賞は、令和六年三月十一日の季音賞審査委員会において受賞者を決定した。審査委員会では、先ず委員五名から受賞に對する総論を述べ、次に令和五年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者とし、その作品について各委員が十分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記三氏の受賞が決定した。受賞者各位は、今年七月号より季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけられると共に、後輩の指導にも心配りされることを望む。

令和六年

かな女賞

田寺玲子
由良ゆら女

令和六年

新珠賞

菅原真理
佐々木史女

山本鬼之介

審査経過

◆かな女賞◆

令和六年のかな女賞について、三月二十二日に主宰より、永年に亘る優秀な作品発表に加えて神戸及び大阪地区の俳句指導者として、また関西例会の運営にも永年尽くしてこられた上記の二氏に受賞する意向を網野幹事長と大村編集長に伝えて同意を得、その旨を四月八日の常任運営幹事会において報告した。

◆新珠賞◆

令和六年の新珠賞は、令和六年三月二十二日の新珠賞審査委員会において、審査委員九名と各地区委員四名による審査結果を基に協議を重ね、上記の二氏の受賞を決定した。審査経過は左記の通り。

第一次審査 応募作品二十編について、各委員が新珠賞に相応しいと判断した作品を五作品選出し、それぞれに三点・二点・一点を配点。その結果、獲得点数の多い六作品「少年老ゆ・恵みの天地・好奇心・鮮やかな時・日天子・道程」の六作品が第一次審査を通過。

第二次審査 右の六作品について各審査員が作品内容を評価して協議を重ね、最終的に投票によって受賞作品を決定した。

令和六年

鼓 笛 賞

岡
田
宣
子

令和六年

山 紫 賞

越
田
栄
子

大村節代

網野月を

◆鼓笛賞◆

令和六年度の鼓笛賞は、令和六年三月の選考会において、山本鬼之介主宰と網野月を幹事長の三者協議の結果、岡田宣子氏の作品に決定しました。

鼓笛集は、水明集会員皆様の研鑽の場です。編集部から投句の月には、投句依頼状を差し上げますので、欠かさず、ご投句をお願いします。尚、鼓笛賞は一度受賞しても、次年度も受賞選考の対象となります。

◆山紫賞◆

令和六年の山紫賞は、令和六年三月二十二日の選考会において、山本鬼之介主宰、大村節代編集長のご合意を経て決定した。受賞者は、巻頭二回を含む特選五回に選抜され、充実した作品を発表されました。なお最終選考には他に丸山マスマ氏、山中いちい氏、横山礼子氏の三名が残り健闘されました。

当該受賞者は、山紫集への投句、また特選への選出は以後同様ですが、本年以降の山紫賞受賞選考対象とはなりません。

水明賞

梅澤輝翠



〔略歴〕昭和二十年新潟県生。
平成二十八年水明入会（第一回、
第二回初めての俳句教室卒業）
令和元年同人。令和二年新珠賞
受賞。青葉の会、雛の会、円卓
の会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

忘れる事の出来ない出来事でした。

三月十一日鬼之介主宰より「水明賞おめでとう」と電話を頂き、そして「昨日は退院もできて」と続けられ、そうだったのです。一生に一度の事が重なりました。延し延しの両股関節の手術を終え前日退院の今日でした。

二日も続けて幸せな事が重なり、本当に現実なのかと思ふ瞬間でした。現実でした。ありがとうございます。

思えば初めての俳句教室に二度も参加をし、やっと二回目の参加で水明とのご縁を頂きました。右も左も解からずに飛び込んだ一年生の青葉の会で主宰自らの御指導を頂き、ここまで育てて頂きました。

鬼之介主宰、順子先生、月を先生、かつ子先生、そして諸先輩の句友の皆様あつての賞と思っております。受賞を励ましとし、一句でも多く心打つ句を詠んでいきたいと思っております。最後になりましたが、選考委員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

▼受賞対象句抄

江ノ電のワイパー忙し夕時雨
雪下駄に赤き爪草白き足袋
門衛の青き制服入社式
海鼠壁あの日そのままに紅椿
落し文渡してほしや紋黄蝶
本籍はダムの底なり虹かかる
万緑を駆けて駆けてや日本海
日本の団扇の風に眠る稚
手開きの鯛の骨の美しき
吹かれ来て葉に縋り付く秋の蝶

水明賞 越田栄子



〔略歴〕昭和三十一年埼玉県生。
平成二十二年水明入会。二十七年同人。
令和元年新珠賞。水明熊谷句会、野ばらの会、水明小川句会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度は栄えある水明賞を頂戴致しまして身に余る光栄と深く御礼申し上げます。

三月十一日に鬼之介主宰より「水明賞に決まりました。おめでとう」とご連絡を頂きました。驚きと戸惑いと喜びに「ありがとうございます。」と申し上げるのが精一杯でした。

これまでご指導賜りました鬼之介主宰、故光二前主宰、故順子先生、和葉先生、諸先輩句友の皆様本当にありがとうございます。また選考委員の皆様感謝申し上げます。そして俳句の世界へと導いて下さった森千代子さんに受賞の報告が出来たのが何より嬉しい事でした。

まだまだ未熟な私にとりまして水明賞の重さに身の引き締まる思いですが、俳句を生涯の友として、自分らしい一句を求めて精進して参ります。

これからも末長く宜しくお願ひ申し上げます。

▼受賞対象句抄

忍城の歴史を今に水の秋
ランナーの追風となれ木枯よ
衣桁には四つ身の晴れ着小春かな
冬深いよよ火の入る登り窯
啓蟄の土やはらかに夜の雨
すれ違ふ母校の制服桜咲く
女生徒の国歌独唱風光る
ふと声を聞きたき人や朧月
大空に起筆の一字竹の秋
炎天や深呼吸して扉押す

季音賞 日高道を



受賞のことば

三月十一日、山本鬼之介主宰から季音賞受賞のお電話を頂き、謹んでお受けいたしました。

この様な大きな賞に値する人間か、はたまた先達の皆さまと同じようなレベルに達しているのか、改めて自問自答いたしました。

しかし賽は既に投げられたわけですので、自分の出来る限りの努力でそれにお応えする所存です。

この受賞を機に改めて俳句に真摯に向き合い、これまで星野光二前主宰、山本鬼之介主宰、網野月を先生はじめ、諸先輩から頂いた教えを改めて思い返し、俳句の道を精進して参りたいと思います。

主宰を始め、諸先輩、句友の皆様改めて感謝を申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

元朝や何事もなき水の面
街に出よ浮かれ猫にも俳諧味
囀や真ん中に街角ピアノ
母の日はいつか妻の日二人旅
板長の手際の良さも夏料理
八月の夾竹桃は魔女の舌
俳諧と団扇現在過去未来
使用済の肉体白し麦の秋
追憶の「ゴンドラの歌」秋の夜
紫の小物をひとつかな女の忌

季音賞 青木鶴城



受賞のことば

高気圧に覆われ広く晴れた三月十一日の夕刻受賞の連絡を頂いた。はじめての俳句教室から俳句を始めて、二年目に新珠賞、四年目に水明賞、そしてこの度七年目に季音賞と順調に躍進が出来たのは、ひとえに山本鬼之介主宰及び網野月を師のご指導の賜物であります。また新樹の会をはじめ、第二例会、若松例会、たかんな俳句会、繭の会、若鮎句会、蛸蚪の会、めだか句会、若楠句会の皆さんと共に研鑽を積めた事が力となったと確信しております。受賞に際し改めて御礼を申し上げます。

受賞をしたとは言え、まだまだ未熟な句作りです。今後也更なる研鑽を積んで参る所存ですのでご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

微力ではありますが、今後とも常任運営幹事として種々のイベントの企画運営、ホームページの充実等々に尽力して参る所存ですので併せて宜しくお願い致します。

▼受賞対象句抄

せせらぎに何を映さむ春彼岸
春の星祈りを幾つ数へたる
昭和の日確かに鍵は掛けた筈
融解になほ雪溪の閉ざすもの
かたつむり地球の果の遠きこと
白南風やいまだ屍の聲乾く
曼殊沙華人は自問を繰り返す
連綿と一日を綴る夜長かな
深川は昔留めず芭蕉の忌
陽を溜めて命を洗ふ春隣

季音賞

檜鼻ことは



〔略歴〕昭和三十一年福井県生。
平成三十一年水明俳句会入会。
令和三年水明同人。令和四年水
明季音同人。若狭水明俳句会主
宰。若狭町俳句連盟常務理事。
現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度、季音賞をいただきましたこと、山本鬼之介主宰をはじめ水明俳句会の皆様方のご指導と励ましのお陰と心より感謝し、御礼申し上げます。ありがとうございます。今回の受賞を励みとし、これからも日々の生活を詠んでみたいと存じます。

平素は社会的な存在として自身の生き方を律している訳ですが、自己の精神の中庸が保てなくなることがあります。酒を嗜んだり、スポーツを楽しんだりして憂さを晴らすことも良いことだとは思いますが、俳句に出会うことにより、専ら美しい花や景色を愛で、句を詠むことで、自分自身の精神の安定を図る事ができることを感じているこの頃です。今後とも山本鬼之介主宰をはじめ、水明俳句会の皆様方のご指導とご交流を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

棟上げは二つもむかし若緑
正眼に構へし鋏ぞ龍天に
竹の秋津軽の宿の文机
母の日や母の箆笥の母子手帳
夏めくやモディリアーニの長き首
水琴や町家の奥の夏座敷
熱帯夜終着駅の時刻表
白団扇草の庵に墓ふたつ
着流しに藍の角帯菊日和
綿虫や寄る辺を探すもの同士

かな女賞

田寺 玲子



〔略歴〕昭和六年神戸市生。
平成八年水明入会。十年同人。
新珠賞。水明賞。季音賞受賞。
神戸大池句会。関西例会所属。現代
俳句協会会員。

受賞に思う

三月二十二日散歩中、何気なく見上げた明るい東の空に十三夜の月がぼっかり浮んでおりました。「菜の花や月は東に日は西に」と摩耶山で詠んだ蕪村の句に近い景を、何百年か後の私が現地に程近い子午線の町で眺めているのだと感慨にふけっております。

翌二十三日、主宰より全く思いも寄らぬ「かな女賞」受賞のお知らせをいただき狼狽するばかりでした。「決まった事だから」のお言葉にも戸惑が続き、卒寿を過ぎ、体調も思わしくない私だと、今だに落着かない思いでおります。

顧みますと、唯唯俳句が好きなだけの菲才な私が、四十年近くもかけがえのない俳句人生を歩んで来られたのは、歴代の主宰・諸先生・諸先輩のご指導と、句友の皆様のご支援のお蔭と言葉で言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

今後の人生は、栄誉ある賞の重みを大切に遅々とはありますが精進したいと思っております。

これからも皆様方の変らぬご指導・ご交誼の程よろしくお願い申し上げます。

かな女賞

由良 ゆら女

受賞に思う

〔略歴〕昭和七年兵庫県生。
本名 由良満智子
水明賞、季音賞受賞。
水明滯つくし句会。関西例会所属。
現代俳句協会会員。

原稿依頼を受け改めて考えてみると、ゆら女さんと知り合ってももう半世紀以上になります。五十数年前、たま市営住宅に住まうようになってすぐ、お付き合いが始まりました。棟も歳も違うのに何か引き合うものがあったのでしょうか。

その頃から彼女は周囲のみんなとは違っていました。近所の困りごとに対して、主婦たちを引き連れて区役所へ陳情に行ったり、学童保育の世話をしたりととても活動的でした。そんな彼女だったので水明滯つくし句会は彼女におんぶに抱っこ状態なのです。

彼女が今回かな女賞という大きな賞を頂くことになったと聞き、現在体調を崩して入院中なのがとても残念ではありません。早期のご回復を心から願っております。

水明滯つくし句会

寺内洋子



新珠賞

菅原真理



〔略歴〕昭和二十五年新潟県生。
平成三十年水明入会、令和元年
同人。青葉の会、櫻蔭句会。現
代俳句協会会員。

受賞のことば

この度は令和六年度新珠賞を頂きまして誠にありがとうございます
でございます。主宰、選考委員会の皆様にご心よりお礼申し上げ
ます。

私は青葉の会と櫻蔭句会でお世話になっております。青
葉の会では夕刻バルコ職員に集會室を追い立てられるまで、
主宰に熱心にご指導いただき、櫻蔭句会では句会後マスマ
先生、先輩句友の皆さんとコーヒールラウンジで意見交換し
勉強させてもらっています。

この賞は、主宰はじめ諸先生方、先輩句友の皆様のお陰
と感謝申し上げます。

最後に、応募句は季節を通してその時々感じた気持ちを、
掛け替えのないものとして詠んでみました。これを機に、
尚一層精進して参りますのでこれからもよろしくお願い申
し上げます。

▼受賞対象句

鮮やかな時

白靴で季節先取り六本木
早苗田やひとり立ちして一直線
蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す
新涼の風動き出すナイトズー
大声で道問ふ秩父秋高し
底紅の紅の揺らぎや昼さがり
組体操の子らの眼差し秋澄めり
石路の花海になだるる灯火に
嬉しきこと数へて浸る柚子湯かな
誰にでも真直ぐに届く初日の出
千葉土産ごそつと活くる野水仙
初午や演舞の子らの狐面
金管の音伸びやかや春来る
交差点曲がればミモザ風は黄に
姉妹じゃれ絡みつく風春の色

新珠賞

佐々木史女



〔略歴〕昭和八年埼玉県生。
平成二十四年水明入会。
令和四年同人。

受賞のことば

この度は令和六年度新珠賞を受賞させて頂きまして誠にありがとうございます。主宰から朝お電話を頂きました時は本当ですかと我が事かと信じられませんでした。夢ではないと思わずうれしいと声をはずましてしまいました。

平成二十四年に入会させて頂き、山本鬼之介先生に投句のみの御指導を賜り好運に恵まれました。なかなか句作が上達せず申し訳なくて退会かなと思いましたが卒寿でももう少し続けようとお世話になって居ります。

主宰先生をはじめ諸先生皆様御指導下さいましてありがとうございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

▼受賞対象句

恵みの天地

庭仕事していて釣瓶落しかな
小春日や第九もれくる公民館
天と地に卒寿の感謝冬びより
菩提寺の諸仏のもとへ初詣
鶏日や吾が身を揺らす悪しきこと
元日の静謐破る能登地震
きつぱりと吾が意伝ふる初電話
然り気なく老いも紅引く松の内
冬晴や能登へ能登へとボランティ
髯の中から青き実を生む竜の玉
懐手して値打下げたる男かな
どこことなく見栄つ張りなる寒牡丹
吾が氣力受けて紅梅咲き揃ふ
老いの身がふらつくほどの春一番
菜の花や大地の恵みありがたう

鼓笛賞

岡田宣子



〔略歴〕昭和二十五年新潟県生。
令和元年水明入会。令和三年同人。第五例会、蝌蚪の会。現代俳句協会会員。

▼受賞対象句

下闇を抜けて開ける三方五湖
片蔭や鯖街道の名残宿
名水を汲む人絶えぬ苔の花

受賞のことば

三月二十二日の夜、編集長の大村節代様より「鼓笛賞に決まりました。」とお電話を頂きました。「私でよろしいのですか。」とうろたえながらも、じわじわと喜びがこみ上げてまいりました。これもひとえに鬼之介主宰・月を先生、編集長はじめ諸先輩、句友の皆様のご指導の賜物と感謝申し上げます。これからも奥が深い俳句を楽しみながら精進してまいります。

山紫賞

越田栄子



〔略歴〕昭和三十三年埼玉県生。
平成二十二年水明入会。二十七年同人。令和元年新珠賞。水明熊谷句会、野ばらの会、水明小川句会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度は山紫賞を賜り誠にありがとうございます。
三月二十三日に網野月を様より山紫賞受賞のご連絡を頂きました。思い掛けない受賞に嬉しさと感謝の気持ちで一杯です。

俳句は作者の思いと読者の鑑賞力で句を介し感性が触れ合うように感じます。

そんな瞬間を喜びに一句一句に思いを込めて楽しんでいくと思います。

今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句

酒蔵に杜氏聴く音春隣
鴨引くや風にリズムの生れし日に
菜園の畝にさしたる風車
新涼の山の頂よりメール

新季音同人(昇欄者)

○新季音「雪」欄

町野 広子
井上 燈女

○新季音「月」欄

飛 永 鼓
原 田 秀 子

○新季音「花」欄

寺 内 洋 子
西 幅 公 子

森 和 子
山 戸 美 子

綿 貫 ひさの

最近の

座談会

名句集を探る

司会 筑紫磐井

ゴラン・ガタリサ「夜のジャズミン」

大西朋

佐藤文香「こゑは消えるのに」

小野裕三

浅川芳直「夜景の奥」

甲斐由起子

●巻頭三句

片山由美子／暮目良雨

成瀬政博

山田佳乃／尾池和夫

筑紫磐井

波切虹洋／清水和代

俳壇編読

●今月の巻

西村我尼吾／土生依子

青木亮人

●俳句と短歌の10作競読

中西亮太／寺井龍哉

大西朋

●LEGEND

私の源流／山口青邨

井上泰至

天為・梶 俱認

俳句の詩語
イメージ辞典

人々作品

藤埜まさ志句集「若水」

藤村公洋

雑誌 森 高幸

一句鑑賞 小川雪魚

家登みろく／斎藤寛子

二ノ宮一雄

秘矢まりえ

諸家書架

一望百里

俳句四季
Haiku Shiki

2024年6月号

5月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

俳句にこめる作者の心

審査委員長 山本鬼之介

今年に残念ながら応募数が昨年より少なかったが、昨年と同様に俳句歴の浅い新人の方々が多く応募され、それと対照的に高齢会員の応募があったことも大変嬉しいことです。

数年前から新人の多い句会を中心に、新珠賞への応募を積極的に呼びかけてきた効果が定着してきたように思われますので、今後もうこうした地道な努力を、句会の指導者や幹事、そして、俳句の先輩諸氏に続けていただくことをお願いする次第です。

さて、今年の審査結果は既報の通りですが、各作品に目を通して、「誤字・脱字・送り仮名・旧仮名遣いなど、基本的な誤りが無いように」と、審査委員長として注意を呼びかけてきた効果が顕れてきたように感じられ嬉しく思いました。応募において注意すべきこと

- ① 文字は一字一字心を込めて丁寧を書く。癖字に注意。
 - ② 誤字・脱字を皆無にする。辞書で充分確認。
 - ③ 送り仮名や旧仮名遣いを正しく表記する。辞書で確認。
 - ④ 季語の配列を考慮する。各季節が入り混じらないこと。
 - ⑤ 題名を熟考すること。作品と同様に題名が大事。作品十五句の雰囲気に対応しい題名を熟考すること。
- この五箇条を心に留めて来年また応募してください。

菅原真理「鮮やかな時」

筆者が審査委員の一人として最高点を付けた作品の一つで、受賞が決まり嬉しかった。心から『おめでとう！』の賛辞を贈る。作品十五句から作者ののびやかな感性が感じられて、新珠賞に相応しい作品だと思った。俳句も然る事ながら題名が実に佳い。タイトルが作品群の特徴を上手く捉えており、受賞に大きく貢献したと言えるだろう。

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

大声で道問ふ秩父秋高し

嬉しきこと数へて浸る柚子湯かな

金管の音伸びやかや春来る

交差点曲がればミモザ風は黄に

これらの作品から作者の嬉々とした人物像が見えてくる。

佐々木史女「恵みの天地」

なかなか評判がよく、第二次審査の対象になった。十五句の統一性には欠けているように思えたが、作者自身が卒寿を迎えた高齢者であるとするならば、委員各位に訴える力があり、それが審査結果に繋がったのだと思う。選考中に筆者も何度も読み返し、第二次審査の対象作品として相応しいものであることを認めた。題名に作者の真心が籠められている。

庭仕事していて釣瓶落しかな

天と地に卒寿の感謝冬びより

然り気なく老いも紅引く松の内

吾が気力受けて紅梅咲き揃ふ

老いの身がふらつくほどの春一番
最終句の大地への挨拶が実によい。

◆第二次審査で受賞にならなかった四作品についての寸評。
森下山菜「少年老ゆ」

なかなか手練れた作品で、第一次審査でかなりの点を得たが、その老練さがブレイキになったのではなからうか。

あれが山頂鼻つけて飲む秋の水
秋の雲流離の果てのにはたづみ
句会果て一人一人となる枯野

菅原卓郎「好奇心」

題名が示す通り、前句を通じて賞を狙う意欲が伝わってきた。荒削りの部分を修正してゆけば、賞に繋がる公算大。

仲見世へ返すきびすや切山椒
参道の飴切るリズム竹の秋
炎昼や漆喰黒き蔵の町

皆川更穂「日天子」

古語や熟語を用いて格調のある作品群を構成しているが、反面それが作者の心を消してしまったのではないか。惜しい。

やはらかなひかりよ雛へみどりごへ
秋日影スイングジャズの匂ふ街
冬茜だらりの帯の揺るる音

綿引まり子「道程」

句の評価以前に、季語の配列（春夏秋冬）が無視されていることに疑問を感じた作品である。以後の改善を切望する。

みどりごのほほにミモザの風優し
新郎のサククス響き風光る
棟上げの槌音高き秋の空

◆次に、第一次審査に残らなかった作品の中からそれぞれ一句を選び、来年の応募を待ち望む筆者の気持の証としたい。

かたちあるものなどなくて春霞
椿落つ羅漢の琵琶に合はせしや
花の名に疎きをとこの花野行く
戻したる瓦の下に蟻の国
門松や竹の切り口清々し
帰り道あれよあれよと雪景色
新蕎麦や尚武と学の城下町
やあやあと神在月の出雲かな
足日かな庭に一株冬菫
水引のひと輪ひと輪に淑気かな
花石榴終の一夜を惜しみけり
冬ざれや居間に賑はふ電子音
紅花や万葉の香を摘む朝
汗流し友と櫓の二十年

石関六弦
前田英子
香田裕誌
吉川拓真
松村笑風
平野久夫
秋谷風舎
反町 修
綿貫ひさの
蛭田律子
椎名泰子
糸井しるく
駒谷行雄
川島夕峰

おめでとう

大村節代

新珠賞応募の二十作品を前に、真剣に作句された様が、どの作品からも伝わりました。思わず襟を正して選句させて頂きました。

選考委員の皆様も、真剣に読み込まれてお集まりになりました。選考委員、地区委員の投票により、第一回目は二十作品を六作品に絞りました。改めて六作品を大いに議論して、ついに受賞二作品に、ほぼ全員一致で決定しました。その後お名前が発表されました。菅原真理、佐々木史女のお二方は、心からお祝い申し上げます。

○菅原真理「鮮やかな時」

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

大声で道問ふ秩父秋高し

組体操の子らの眼差し秋澄めり

金管の音伸びやかや春來たる

交差点曲がればミモザ風は黄に

子供達をやさしく見つめる作者、それに応えている子供達。組体操だったり、金管楽器だったり、小道具は違うが「鮮やかな時」がしっかりと伝わり躍動感にあふれています。

○佐々木史女「恵みの天地」

小春日や第九もれくる公民館

然り気なく老いも紅引く松の内

懐手して値打下げたる男かな

吾が気力受けて紅梅咲き揃ふ

菜の花や大地の恵みありがたう

選句の折、手馴れた句にびっくりしましたが、新珠賞応募には、年齢も経験も制限がないので全て同じ目線で選句させて頂きました。大地から気をもらい句を詠まれている様子が伝わります。ますますご健吟を！

今年度は受賞に到らなかつた方も、来年度は新たな気持で作句され、是非ご応募下さい。

○綿貫ひさの「冬から春へ」

煤籠脱出先は映画館

春惜む飛鳥に御座す恋仏

冬から春へと季語を絞って作句された。それ故、臨場感が増して、思考が深まります。

○蛭田律子「境内諸処」

冬晴れに荒行僧の経拾ふ

春風やスカーフはづす伽藍前

境内で二十句を作句された句の数々に感心しました。送り仮名の旧仮名に気をつけて下さい。

○椎名泰子「藍」

香に酔ひて帰心忘るる梅見かな

十三夜揺るる笛の音藍の空

「藍」の色は日本人の心に響く色です。何とも懐しい思いで読みました。季語や漢字をくどい位に見直して下さい。

挑戦に感銘

青木鶴城

先ず今年度の新珠賞を受賞された菅原真理、佐々木史女のご二人に心よりお祝い申し上げます。

令和六年度は二十作品からの選考となったが、今年度の作品も其々工夫を凝らして練り上げられ、オリジナリティーを感じさせる作品であった。特にご高齢の方からの挑戦が実を結ぶ結果となったことは、若い人への大いなる刺激となるものと確信する。

「鮮やかな時」

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

大声で道問ふ秩父秋高し

交差点曲がればミモザ風は黄に

夏の白靴から始まり、秋の底紅、冬の柚子湯、春の初午というように変則的な季語の並びの作品。題名の鮮やかな時に關しては少し違和感を感じなくもなかったが、一句目の蟬時雨にいったい作者のどんな感情が巻き戻されたのか。「ゆるりと時を巻き戻す」の措辞が素晴らしい。二句目は、秩父路を行く作者の澁刺とした姿が目に浮かぶ作品。三句目、交差点、ミモザ、風の色の組み合わせが良い。「風は黄に」に春のうきうき感が表現された。

「恵みの天地」

天と地に卒寿の感謝冬びより

佐々木史女

然り気なく老いも紅引く松の内

吾が気力受けて紅梅咲き揃ふ

卒寿を迎えても愛らしく紅を引き、生きる気力は紅梅さへも咲き誇らせ、天地の恵みに感謝しつつ、ありがたうと締めくくる構成に心地よい余韻を感じた作品。ただ、能登地震の句が多すぎた感は否めない。

残念ながら受賞は逃がしたものの、特に印象に残った作品と句を下記に紹介する。

「門出風」

一瞬が宇宙の歴史石鱈玉

恋猫の知らぬ人類史の行方

若々しい句作りに感銘を受けた作品。全体的に理屈や観念的な句が多くなりすぎたか。

吉川拓真

「師の賀状」

御降りの祓う参礼氏の神

初暦一粒万倍確かむる

農作業に実際に携わってこそ詠める俳句や家庭の様子が感じられ、全体の構成もよく大変印象に残った作品。

松村笑風

「椿祭り」

椿祭雨情の歌碑にそつと手を

冬ざれや居間に賑はふ電子音

昨年も記したが、題名の付け方に安易さを感じる作品が多い。作品全体を何度も読み返し、題名を含めて推敲に推敲を重ねて頂くように期待したい。

糸井しるく

華の刻

石井喜恵

今年の新珠賞には二十名の応募作品を得て、どの様な作品に出会えるかと心楽しく選に臨んだ。世情騒がしき折、詩心を如何に持ち続けるかそんな課題を他所に、正に力作揃いであった。受賞された菅原真理、佐々木史女のお二人ほんとうにおめでとうございます。心よりのエールをお送りします。

鮮やかな時 菅原真理

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

嬉しきこと数へて浸る柚子湯かな

千葉土産こそつと活くる野水仙

金管の音伸びやかや春来る

交差点曲がればミモザ風は黄に

作者が此処で出会った心に残る情景を素直に詠んだ十五句に共感を覚えた。そして此の今が「鮮やかな時」だと言いつつ題名も良かったのでは。柚子湯の句、正にこの気分言い得ている。花を活けるのにこそつとは恐れ入った。だが、野水仙であれば然もあろう。新鮮な措辞となった。

恵みの天地 佐々木史女

庭仕事していて釣瓶落しかな

天と地に卒寿の感謝冬びより

然り気なく老いも紅引く松の内

懐手して値下げたる男かな

菜の花や大地の恵みありがたう

卒寿を迎えて新珠賞に挑戦するという見事な心意気に感じ入った。さて、然り気なく紅の色は濃か淡か。値打ちを下げたる男は誰なのか。俳諧味あふるる句。十五句最後に置いた菜の花の句「ありがたう」が読む者の心に響く。人生を達観した作者の面目躍如である。

心に残った期待する作品を。

蕎麦春秋 秋谷風舎

湯上がりの夕べの秋の茶そばかな

親も子も初そば打ちや春の風

秋の新そばの美味しさ、親子で体験する初めてのそば打ち、和やかな景が眼前に心が暖かくなりました。

日天子 皆川更穂

噴水や崩るるきはの兀然と

行く手ある光輝を透す枯木かな

作者の個性であろう選び抜かれた言葉で破綻なく詠まれている。委員の選でもかなりの高得点であった。十五句中、ふつと息抜くような柔らかない句が欲しいとの意見も……。

踊三昧 川島夕峰

気が急ひて袖の通らぬ浴衣かな

夜も更けて胡弓滲みるや風の盆

題名通り、佐渡おけさから始まり河内音頭、郡上踊りと、終って帰る重き足まで踊りの好きな作者の姿が躍動する。

珠を磨く

石山かつ子

今年は桜の開花も遅く蕾のままの三月二十二日の選考会に二十作品が揃いました。それぞれの十五句の中に人生があり、俳句観のあることがひしひしと伝わり、こちらも衿を正し気を引き締めて選考会に望みました。

おのおの六作品にしほり、何度も意見を交し合い検討の結果、全員一致で菅原真理・佐々木史女両氏の受賞となりました。

「鮮やかな時」

白靴で季節の先取り六本木

大声で道問ふ秩父秋高し

底紅の紅の揺らぎや昼さがり

金管の音伸びやかや春来る

交差点曲がればミモザ風は黄に

明るい性格の作者の一年がたしかな眼で一年を見つめていらつしやる。まだ早い季節に六本木を闊歩されている様子。

「鮮やかな時」という題名も良かったと思います。

「恵みの天地」

佐々木史女

然り気なく老いも紅引く松の内

どことなく見栄つ張りなる寒牡丹

吾が気力受けて紅梅咲き揃ふ

菜の花や大地の恵みありがたう

老いと言いながら、意欲的に自然体で天地に感謝しつつ、

少し見栄を張って俳句創作をなさっている作者にエールを送ります。

中天へ一直線の揚雲雀

反町 修

鳴きながら雲雀が中天に上って行く様子をよく執らえています。物をじっくりと観察をして句作りをしているところが良いと思います。

病室の父の枕辺檸檬置く

綿引まりこ

入院なさっている父上の枕辺にそつと檸檬を置いてお帰りになる。檸檬の黄色が病人を力づけてくれます。全体としてやさしさのある句と思えました。また来年に期待いたします。

継続は力なり 日高道を

令和六年度の新珠賞の選考が終わりました。

今年は二十名の応募がありました。

新珠賞は水明の他の結社賞と違い、応募作品一五句の絶対評価で受賞が決定されます。その為にはまず応募しなくては始まりません。

今回見事に受賞された菅原真理、佐々木史女のお二方には心よりお祝い申しあげます。

また今回は残念ながら受賞に至らなかった皆さんも、また挑戦を躊躇っている方も、是非来年を目指して頂きたいと思えます。

「鮮やかな時」

菅原真理

題名の通り、作者の身の回りの事象を明るく前向きにとらえた作品が揃っていて、作品に作者の存在がみえます。

白靴で季節先取り六本木

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

新涼の風動き出すナイトスー

嬉しきこと数へて浸る柚子湯かな

金管の音伸びやかや春来る

交差点曲がればミモザ風は黄に

等の句は、色彩、音、香り等を上手に叙景して良句となつ

ています。

今後さらに精進されることを期待しております。

「恵みの天地」

佐々木史女

十五句を通じて作者の身の回りの日常との関わり合いや、抗うことのできない老いや、自然に対する感謝の気持ちがあふれている句が揃っています。

庭仕事していて釣瓶落しかな

天と地に卒寿の感謝冬びより

然り気なく老いも紅引く松の内

吾が気力受けて紅梅咲き揃ふ

菜の花や大地の恵みありがたう

等の作品には特にそれらを感じ取れる作品となっております。作者の変わらぬ俳句作りに対する情熱に敬意を表します。

今回受賞に至らなかったものの、「好奇心」菅原卓郎さん、

「少年老ゆ」森下山菜さん、「日天子」皆川更穂さんの各作品

は良句が多く、最後まで受賞を争ったことを付け加えたい。

来年を楽しみに待ちたいと思います。

その他印象に残った句から

ベランダに親子揃ひの雪だるま

高館の小さき御堂草いさ

是非来年も継続して挑戦していただきたいと思えます。皆さんの挑戦の力、「継続は力なり」です。

平野久夫

駒谷行雄

飛躍への歩み 保坂翔太

水明の「登竜門」である新珠賞に二十名の方々が挑戦された。選考委員会では、各委員がどの作品を推すのかを話し合い、六名の方々の作品を受賞候補とすることを決め、議論を重ねた。その結果、菅原真理氏、佐々木史女氏の作品が選ばれ、両氏が新珠賞を受賞されることになった。心よりお祝い申し上げたい。

◇鮮やかな時

菅原真理

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す
嬉しきこと数へて浸る柚子湯かな

金管の音伸びやかや春來たる

交差点曲がればミモザ風は黄に

十五句に一貫した明るさがあり、日常の生活を通して「鮮やかな時」をしっかりと詠んでいることに好感が持てた。第一句は夏の季語で始まり、秋、冬、新年、冬、最後の句は春の季語で締めている。句の並べ方にも工夫が感じられ、より明るさを感じる。カタカナの遣い方に気になる句あり。

◇恵みの天地

佐々木史女

天と地に卒寿の感謝冬びより

然り気なく老いも紅引く松の内

吾が気力受けて紅梅咲き揃ふ

菜の花や大地の恵みありがたう

作品を読みつつ年齢が高い方ではないかと想像したが、気力十分の句が多い。天地への恵みに感謝し、生きている感慨と喜びを素直に詠っているところが良い。「恵みの天地」という題名が全句を通して感じ取ることができている。

受賞をのがした四人の作家の句を取り上げる。まずは、森下山菜氏の「少年老ゆ」と題した作品。十五句の前半は共感する句が多かったが、後半は物足りない句が多く惜しい。評価がわかれた。来年に期待。

少年老ゆあまごの谿はダムの底

水晶体取り替へて知る椎若葉

次に石関六弦氏の作品。題名「アクア」は、英語・ラテン語で「水」が由来の言葉。言うなればテーマは「水」であろう。推敲によりもっと佳い句ができるはず。題名にも工夫を。

海月舞ふアクアリウムの無重力

国自慢交はす出で湯や紅葉川

さらに、皆川更穂氏の「日天子」と題した作品。言葉の遣い方、句の構成に魅力はあるが、句が硬い。自然体も必要。噴水や崩るるきはの兀然と

老耄は海に還るや冬落暉

最後に、好い意味で気になる作家、「門出風」と題した吉川拓真氏の作品。魅力ある句のうちの破調の一句

子の風車回る森の慰霊碑

新珠賞に応募された作家の方々の、今後の大いなる飛躍を期待している。

颯爽と

曲淵徹雄

菅原真理さん、佐々木史女さんお二人の新珠賞受賞を心からお祝い申し上げます。また、二十名の各氏が粒よりの十五句をそろえた作品で令和六年、新珠賞に応募されたことに拍手を送りたいと思います。

本賞の選考に際しては、選考委員会において各委員がそれぞれの推薦する作品、その他の意見を交わし、幾度かの集約を行った結果、受賞の二作品が選ばれた。

「鮮やかな時」 菅原真理

早苗田やひとり立ちして一直線

底紅の紅の揺らぎや昼さがり

嬉しきこと数へて浸る柚子湯かな

誰にでも真直ぐに届く初日の出

交差点曲がればミモザ風は黄に

作者・真理さんの自分の言葉で、肩に力の入らない表現で句が詠まれており、その句を読むときにすんなりと読むことが出来る。いずれの句も詠まれている景と作者の心情とが寄り添っている。

「恵みの天地」 佐々木史女

庭仕事していて釣瓶落しかな

天と地に卒寿の感謝冬びより

然り気なく老いも紅引く松の内

懐手して値下げたる男かな

菜の花や大地の恵みありがたう

写生したうえで素直に句が詠まれ、のびのびとしておらかに作られている。どの句も作者の姿・心情が伺える句になっている。掲句の第一句の身辺の写生、第二句の生きる姿勢、第三句の粋、第四句の俳味、第五句の人柄を思わせる句など、句材を取り上げる範囲も広い。これからますます秀句を作り続けられることと思います。

今回は残念ながら受賞には届かなかつたが、次回の新珠賞を期待したい方の作品。

整地待つ風の遊び場春浅し

前田英子

柚道の羅漢それぞれ落椿

二句いずれも上五と中七に詠いたい対象を描写し、それを下五の季語でしっかりと受けとめている。

三月の光の中へ妻の旅

結願の宿坊独り掘炬燵

香田裕誌

一句目の妻の旅の句では中七の「光の中へ」に、二句目の作者の旅の句では「宿坊独り」に、それぞれの旅の情景が浮かんでくる。

一句目の妻の旅の句では中七の「光の中へ」に、二句目の作者の旅の句では「宿坊独り」に、それぞれの旅の情景が浮かんでくる。

推薦委員寸評より

○大橋迪代

「鮮やかな時」 菅原真理

題名が魅力的。

新涼の風動き出すナイトズー

初午や演舞の子らの狐面

金管の音伸びやかや春来る

「日天子」 皆川更穂

十五句そつなく舌頭になめらか、お見事。

やはらかなひかりよ雛へみどりごへ

冬茜だらりの帯の揺るる音

○檜鼻ことは

「恵みの天地」 佐々木史女

日々の営みを丁寧に誠実に重ねられている様子が句より読み取れます。

「好奇心」 菅原卓郎

小気味の良い措辞。一句一句の景が鮮やかです。

○永野史代

「少年老ゆ」 森下山菜

水晶体取り替へて知る椎若葉

手袋と休暇ローマに置き忘れ

かざはなや紅茶に浸すマドレーヌ

これらの句に魅了されました。

○五明 昇

「鮮やかな時」 菅原真理

題名にふさわしい明るく躍動的な作品群だ。視点も前向きでストーリー性もあるが、春一句を末尾に置いたのは何とも惜しい。

「踊三昧」(原稿は踊三昧) 川島夕峰

踊り好きな作者が、さまざまな土地の踊りを多角的に詠みあげた力作。ともすれば、観光案内的になり勝ちなテーマを一篇の叙事詩にまとめあげている。

新珠賞秀句鑑賞

網野月を

新珠賞応募作品から秀句、ならびに筆者の感銘を受けた句を鑑賞する。並びは作品の到着順である。

秋の雲流離の果てのにはたづみ 森下山菜

雲と水たまりの配置が功を奏している。本質の同じくするものを上五座五に配置した構成力を称賛したい。

しあはせは雲より近し初雲雀 石関六弦

座五の「初雲雀」が効いている。こういう場合には「揚雲雀」として安易になりがちなものだが、言い過ぎないで抑えた表現がかえって句の奥行きを増したかと思う。他に「ジツポールの音は虚空へ霜の声」がある。

整地待つ風の遊び場春浅し 前田英子

上五の「整地待つ」で、新興住宅地のようなところを想定して解してみた。中七の表現内容が句を決定している。整地を待っているとも読めるが、整地が春風を待っているようにも感じるところが不思議である。

一輪に歳月のあり蓮の花 香田裕誌

中七の「…あり」から一読、こと俳句のように思われるが内容的には抒情の句であろう。季語「蓮の花」の本意に十分に即している。作者本人の想いの深さを想像するのだが、読み手が別解釈することをも許容している句である。

子の風車回る森の慰霊碑 吉川拓真

「慰霊碑」を見舞った「子」であるのか、もしくは「子」の「慰霊碑」であるのかは分らない。筆者は後者のように感じた。十五句ともに独特のリズム感と、そのリズムを醸し出す内容に新鮮味を覚える。他に「菟集の古書売りたる日の緑夜」「笑みのある給仕ロボット年の暮」がありいずれも佳句である。

懐手して値下げたる男かな 佐々木史女

掲句は軽味の句であろう。その軽さにわざとらしさが無い。厭味でないのだ。より高いところから優しい眼差しで見つめられているような「男」なのである。軽味の叙法はこのように使用すると諧謔ではなく、句をより広角にする効果がある。他に「どことなく見栄つ張りなる寒牡丹」がある。

大小の靴の散らかる二日かな 松村笑風

人々が正月に集う風習を保ち続けている景である。しかも其処には大人も子供もいるのである。あたたかい日本の正月である。

口金を二度うつ女の麦酒かな 菅原卓郎

よく見えています。居酒屋のお姐さんは、大びんのブリキの王冠を栓抜きで「二度うつ」のである。こういう景を句にしようにとする心根が憎い。他に「靴紐をなほす大地の早かな」がある。

雪解けて百貨店まで散歩道 平野久夫

昔から営業しているこじんまりとした「百貨店」を想像した。もしくは作者にとっては至極身近な「百貨店」であろう。

何を買うわけでは無いのだが、「雪解け」の開放感が効いている。

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

菅原真理

一句のみであったなら、八月十五日を想起してしまうのだが、「巻き戻」された時は、作者のご幼少時の想い出の一シーンくらいに解した方が良さであろう。十五句は至ってポジティブな方向性を有しているからである。他に「組体操の子らの眼差し秋澄めり」「石路の花海になだるる灯火に」がある。

停車場を飛び立つ蜂の早さかな

秋谷風舎

人為の「停車場」と「蜂の早さ」の相対比が、句の生命線である。詩興が無いとする評者もおられるかも知れないが、俳句ならではの叙景句であろうと考える。

秋日影スイングジャズの匂ふ街

皆川更穂

座五の「匂ふ街」が良い。宵から夜にかけては聞こえるのであるうが、昼間は街に沁みついたスイングが「匂ふ」のである。皮膚感覚の表現である。

中天へ一直線の揚雲雀

反町 修

句意同様に真直ぐな表現である。真直ぐな表現は作者ご自身の本質に求めることが出来ると考える。特に「やあやあ」と神在月の出雲かな」「半島の白き灯台石路の花」「寒紅や白装束の死出の旅」がそうである。

初めてのピアノ蝶来て飛び跳ねる

綿引まり子

「ピアノ」のあとに切れがあつて、句跨りの作りであろうと考える。この世界観は作者固有のものである。

のどけしや能書多き整骨院

綿引ひさの

諧謔の横溢している句である。「能書」よりも指を動かして欲しいのにといいところだ。「のどけしや」であるから、それでも笑っている作者がいるのである。

梅の香や漆喰の塀に紅映す

蛭田律子

なかなか技巧のきいている句作りである。臭覚と視覚を織り交ぜながら、そこに読者の納得を引き出している。作者は塀内にいるのでしょうか。

白鳥の寝や一湾の岩の如

椎名泰子

座五の「岩の如」から静の極みを表現している。句のリズムは中七の途中で「…や」切れして句跨りである。静であること且つ全体的に硬質なイメージを有しているようだ。

寒の餅暮し丁寧厨人

糸井しるく

この作者は、日常生活に密着した句作りを旨とされているようだ。この「寒の餅」は水餅であろうか。このテーマ性を貫き通して欲しいと祈っている。

紅花や万葉の香を摘む朝

駒谷行雄

俳句を嗜むことで、人生の時空間を飛躍することが出来るようになる。俳句の楽しさと俳句自由を謳歌している句である。

踊りの輪獲物見つけた蟻のごと

川島夕峰

「踊りの輪」至体の人の群れを表現しているように読むのが至当であろうが、一匹の蟻に特化して解釈しても面白いだろう。「見つけた」「獲物」は意中の人であろうか。

新 珠 賞 (結果報告)

○受賞作品

鮮やかな時

菅原真理

恵みの天地

佐々木史女

○予選通過作品

(到着順)

少年老ゆ

森下山菜

アクア

石関六弦

落椿

前田英子

四季追想

香田裕誌

門出風

吉川拓真

師の賀状

松村笑風

好奇心

菅原卓郎

積雪

平野久夫

蕎麦春秋

秋谷風舎

日天子

皆川更穂

寒紅

反町修

道程

綿引まり子

冬から春へ

綿貫ひさの

境内諸処

蛭田律子

藍

椎名泰子

椿祭り

糸井しるく

奥の細道を行く

駒谷行雄

踊三昧

川島夕峰



四月号の巻頭句

季音 雪 煉瓦塀に春遠からじ港町 網野月を

季音 月 水仙や沖を小樽へ向かふ船 町野広子

季音 花 春きざす爪にも花を美爪術 野田静香

水明集 寒林の踏み入る先の瀬音かな 新曆文

鼓笛集 参道のうす日の透くる初音かな 霜多光代

山紫集 まだ色を持たぬ波音初日待つ 越田栄子

現代俳句鑑賞

網野月を

空深く日めぐる幸を花の兄

池田澄子

随分と生きてやっぱり春は花
桜さくら嫌な昔もありまして
使わず捨てずお客様用蘭座布団
まぼろしの亡師よ春のセーターで

〔俳句〕3月号・春は花より

第一句目は「花の兄」であるから梅のことである。その頃、つまり初春には「空深く日めぐる」季節であるということなのである。冬から春になって空の深度が増したということか、日がより空を広げたということなのか、春の「幸」を言い当てている。第二句目は「花」の存在感を「やっぱり」と叙している。生きていれば生きている程にそう思えるのである。誰もが実感する句意である。第三句目は先の大戦を想定しての物言いであろうか、筆者の勝手な考えかも知れない。第四句目は作者独特の日常に対するイロニーである。何故かこのイロニーには共感させられるし、安心感さえ覚えるのである。第五句目はダンディーであった亡師・三橋敏雄が夢枕に「春のセーター」姿で現れたということである。はたして何を告げ

に夢枕に立たれたのであろうか、筆者にうかがってみたい。

数え日の平たきところ全て拭き

森野 稔

〔俳句〕3月号・地震より

年の暮れの日常の一コマを活写している。「平たきところ」は床も廊下も、そして窓の横になる棧も鍋釜の蓋までも含んでいるだろうか。「全て」の副詞に年の暮れの大掃除に通じる念の入れ方が感じられる。

湯ざめして鏡の裏に棲むごとし

松野 苑子

〔俳句〕3月号・鏡の裏より

「湯ざめして」鏡に映る自分をつくづくと見たのである。その姿はまるで、その鏡面の裏にいる様な姿をしていたのである。「棲むごとし」ということは、何やらオカルトめいたものか、現実社会から逃避した心理的境地を表出しているようにも読める。「鏡の裏に棲む」がこの句の肝である。他に「木登りに良き樹しづかに冬の雨」がある。

子を叱る男こゑ佳き寒椿

亀割 潔

〔俳句〕3月号・冬の旅より

何故だか作者は、「子を叱る男」の声の佳さに聞き惚れている。本来感じ入る箇所ではないところに聞き惚れてしまった作者の、自らの驚きと共にそれでも「佳き」「こゑ」に「寒椿」の質感が百パーセント合致している。

梅の香に抱かれに行く回復期 つげ葉子

〔俳句界〕3月号・春動くより

梅の時期にリハビリが始まったということであろう。病気とは異なる事象かも知れないが、季節の開いて行く頃に合わせ、作者の何かが「回復」しているのである。そこは句中に言い表されていないのであって、読者が想像することになるに任されているだろう。他に「梅咲くや役行者の息遣ひ」「紅梅と同じ色着て逢瀬めく」がある。

ジオラマのやうな復興朧月 黒川由紀子

〔俳句界〕3月号・雪解川より

「ジオラマのやうな」の中に作者とこの「復興」の地との距離感を表現しようと思われる。関係性と言った方が良くかも知れない。大いに関心を寄せていて情もあるのである。一方で親族や親戚がその地にいる訳ではないのである。その感覚のもどかしさが座五の季語「朧月」に担保されているように読める。他に「たをやかに矜持貫く黄水仙」がある。

摘みきれぬ土筆の中を帰りけり 千葉皓史

〔俳句四季〕3月号・俳句と短歌の10作競詠より

あまりにも多い土筆を要るだけ採って帰るのであるが、ま

だまだ土筆は一面に繁茂している。残念な心も読み取れるのだが、何故か人の自然に対する謙虚さも感じるのである。

一茶忌のすぐに冷たき湯呑かな 鈴木しげを

〔俳句四季〕3月号・年の内より

「一茶忌」は陰暦の十一月十九日である。今の暦であるなら、年の暮れであろう。句意の通り、淹れた茶が「すぐに冷た」くなってしまふ季節である。誰もが納得するいわば合理的な内容なのである。が「湯呑」という日常のアイテムに取材したところに一茶に通じる、説明不可能な関係性を見出しているのだ。詩でなければこの関係性は言い得ないであろう。

たんぼぼ野すでに座りし人の跡 茂木和子

見えてゐて見失ふもの石路の花
寒夕焼名残りの端を歩きけり

老老を朗朗と生くげんげん野

〔句集「朗朗と」より〕

四句共に作者ならではの個性の横溢している句である。第一句目は初めを取れなかったことを悔やむ意ではない。「すでに」この絶景を楽しんだ人がいるのだと思いやって、自らも又と安堵している風である。第二句目は座五の「石路の花」の特性をよく把握している。冬の花は忘れられがちである、足元に咲く花は尚更であろう。第三句目は中七の「名残りの端」に尽きるだろう。作者の心境を余すことなく、そしてさり気無く叙している。第四句目は句題集にもなった句である。作者の現在の心境を託している。

俳誌望見 染谷風子

「森の座」二〇二四年二月号 通巻八十三号

主宰 横澤放川 発行所 東京都文京区

平成二九年三月、「萬緑」終刊にともない、平成二九年四月、「萬緑」の代表選者であった横澤放川氏が「萬緑」の後継誌として創刊。「中村草田男の精神を正しく継承する」をモットーとする。

巻頭の主宰詠「あそびけり」十句より三句。

赤とんぼ宮田の自転車走つて来い

宵月のむかしは門にあそびけり

少年にも一分の俠氣鴟のこゑ

一句目、宮田自転車は明治二三年創業の老舗。団塊の世代には懐かしい名称だ。大気が澄み、晴れわたった秋空の下、赤とんぼと宮田自転車の競争は壮快である。二句目、夕月夜のおぼつかない暗さは子供でも心引かれるものである。郷愁を誘う句である。三句目、与謝野鉄幹は「六分の俠氣四分の熱」と歌った。句中の少年は作者であると筆者は推測する。

一人作品「樹冠帯」四名二八句より共鳴句四句。

目で鼻で彫るかに至近版木牙ゆ 中村 弘

ぎす鳴くや隣家の灯りまだつかず 矢須 恵由

とはに若き男の裸像雁渡る 和田 西方

常用の辞書の膨らみ冬立ちぬ 河野 靖

一句目、浮世絵の彫師か。美人画の髪を生え際の技術はまさに神技。「牙ゆ」との取合せが秀逸。二句目、芭蕉の「秋深き」の句を彷彿させる。四句目、辞書は使い込むと紙が膨らみケースに入らなくなる。秋の夜長の読書の結果か。気が付けば既に立冬である。読書は外国の雑誌か小説か詩集か。

一人作品「光樹の譜」七名四九句より共鳴句三句。

十二月八日髪切る爪を切る 石田 経治

待合の椅子の背もたれ寒に入る 小川 雪魚

軒氷柱駒子の部屋の姿見に 小林 収

一句目、重い句である。「遺髪」「遺爪」は死に行く者が形に残すものである。十二月八日は開戦日である。作者は先の大戦で亡くなった三百万の英霊に合掌するとともに、最近の世界情勢を憂いているのである。

一人作品「盛樹の歌」三二名二二四句より共鳴句四句。

初霜と売れない土地のかがやきぬ 敦賀 恵子

大盛とついつい八十路の走り蕎麦 加藤 仁

「せんさつ」つてなあと子が聞く冬さくら 小池 厚子

命惜し菊のひらくを待ち居れば 東谷 信子

本号は令和五年の全国大会の特集号である。「中村草田男の女性観」の題で六人の同人によるパネルディスカッションが掲載されている。草田男の女性観を知るに大変貴重な記事である。「森の座」の今後の益益の発展を願ってやまない。

句集喝采

曲淵徹雄

◆高橋比呂子「風果」

現代俳句協会

著者略歴 青森県生。現在「豈の会」「LOTUS」同人。句集『アマラント』『ふらくたる』『風と楕円』『つがるからつゆいり』。共著『俳句七部集』等。現代俳句協会会員、国際俳句交流協会会員、埼玉文芸家集団理事、さいたま文藝家協会理事。

句集名「風果」は、「果」には事柄が進んでしまった後に生じる成果などの意があり、これまで旅して感じた風土など、刻々の風との合成語と、「あとがき」にある。本句集には有季定型から無季、自由律までの「風果」二六一句を収載。

牡牛からなみだもらつてかえりけり

あつたま 風九月信者のように百塔あり

璞を売りきさらぎといえり

枕詞のようなりいちにちすぎにけり

ゆずりはの四季めぐりてはゆずりはの

沈丁花ひらりとあそび白髪す

髪として欲望の朝を洗ひころす

小暑かなよしこの笑窪ころす

以上、有季定型を基本とするが、一行詩の味わいの句も。

次記は、神話の世界に心をよせた連作四三句からの一句。

たかまのはらみとのまくはひいざなきの

俳句とかかわることは、「言葉との格闘の連続である」と

「あとがき」に記す著者は、さらに「これまでとは違うもの」を追い求めてゆかれるのであろう。

◆茂木和子「朗朗と」

文學の森

著者略歴 昭和十年埼玉県生。昭和五十二年「水明」入会。平成三年新珠賞。平成六年水明賞。平成九年季音賞。平成二十七年かな女賞。平成十六年句集『隠し壺』。現代俳句協会会員。埼玉県現代俳句協会会員。

「水明」に入会して一筋に俳句の道を進んで来られた著者『朗朗と』は、第一句集『隠し壺』上梓から十八年余りの三七九句を収載。「あとがき」にあるように「前向きに明るく生きてゆこう」という著者の心が、豊富な句材で詠まれている。句集名は「老老を朗朗と生くげん野」より。

旅始め水平線へ銅鑼打てり

無傷の空へ白木蓮の生一本

飛ぶ構へ青水無月の風見鶏

鳩吹ききて一人は淋し膝頭

翼に首入れて水鳥個に徹す

以上、五感を澄まして詠んだ切れのよい句から五句。

封を切る事に始まる初仕事

教室の窓より窓へ木の芽風

「折り入つて」と膝を寄せくる冷し酒

指角力張り合ふ親子青みかん

盛り上がる話の外に毛糸玉

以上五句、身近な句材をとらえて、臨場感のある句に。

他に「春の雲人を恋ふれば土鈴鳴る」、「器量好しばかり干さるる唐辛子」、「人も風も素通る銀座冬柳」など。

山本鬼之介 選

水明集

節分のかどの豆屋の五合枘
鉄瓶の猛る湯玉や寒の明け
梅東風や明けて半寿の二従姉妹
春北斗石に銘ある古墨かな
春の雪暮夜の列車の軋み吸ふ

伊 奈 菅原卓郎

韓流の小顔に纏ふ春シヨール
寒明の薄明待つや月と星
公魚の釣れぬ時間の至福かな
好日や君とランチの桜鯛
電飾の夜に備へたる枯木かな

さいたま 新 曆文

厳かな園児の舞や午祭
凍返る家解体の重機音
草青む喋り通しの女高生
雨粒を染むるほどなり花ミモザ
定宿は菜の花畑の只中に

さいたま 菅原真理

節分の日待合せ湯島まで
下野の初午母の鬼おろし
銀葉のミモザほころぶ教会堂
春光の届くや半跏思惟の像
独眼の城主馬上に春疾風

越 谷 阿部幸代

暮れなづむ藍となりたる春の湖
鳥の風はらみ椿の咲き溢る
ぬか雨に焼野の匂ひ鎮みゆく
蒼天へ銀白放つ猫柳
猫柳川面明かりに煌めけり

さいたま 岡田宣子

春禽や衣桁に掛くる晴れの衣
三寒の四温となるや明り窓
水菜を濯ぐ細き指先ほの紅し
合格と結婚祝散財す
校庭の楠春の鳥集ふ

小林京子

おほらかな風の香りや春シヨール
春シヨール旅の疲れがこぼれ落つ
寒明の足湯姦し湯の街よ
寒明の笥行き交ふみ山かな
実印を捺す背伸ばすや遅桜

さいたま 篠崎紀子

立春や家に籠りてジャスミン茶
立春や筆の進まぬ課題文
立春の枕カバーの白さかな
春立つや烏の統ぶる刹那にも
立春と言ふ字を書いてみたくなり

さいたま 吉川拓真

冬晴の雨後の畑は息を吐く
四季のある国の由緒や節分会
春立ちて僧侶求道の修行かな
月影に呼応し笑むや花ミモザ
春天に鯨きらめかせ名古屋城

山岸久美子

寒明や湯のこまやかに旅の宿
ステージで舞ふやモデルの春シヨール
雨しめやかに紅迫る青木の実
榛名富士公魚釣りの穴青し
商用や令月にして風和む

霜多光代

寒明は夫婦二人の朝ご飯
色を食べ音を味はふ水菜かな
春めくやハローキティにあへる街
白杖の友の背中に浅き春
春一番紙垂千切れたる社かな

元田亮一

冬うらら見知らぬ人といひ会釈
幻覚か隣に夫も日向ぼこ
大寒や日本川癡幻に
勾玉に似せて春色イヤリング
春の朝片目ひとつの目玉焼

清水桂子

左義長や松の油の燃ゆる音
紙漉きの太く真白き腕かな
初場所や瓜実顔の厚化粧
仏壇の松未だ青し春立ちぬ
草原に仔羊生まる猫柳

池田珪子

寒明の遠山遠くなりけり
鐘の音の鼓膜に柔き寒の明
実朝の墓に降り敷く牡丹雪
春眠てふ贅沢愛づる自由人
手の糸にびくびく躍る雀魚

皆川更穂

手入れするひとなき庭の黄水仙
春寒し夢解きをする寝床かな
ふうわりと心も軽く春シヨール
淡雪の刹那に向くるカメラかな
柏手に紛れ社の亀鳴くや

平塚 丸屋詠子

浅き春役者揃へど出番なし
屋根を越え飛び行く風や春浅し
ねぢれたる古木の幹や梅見茶屋
幕末を思ふ梅見の偕楽園
水の無き避難生活春寒し

さいたま 千坂平通

鳥引くや能登半島は手のかたち
春シヨールたたみて受くる小盃
江戸城も皇居も大家路の臺
観梅に酔うてけはしき蛭坂
ミモザ抱く此処で「素敵」は女子の語彙

さいたま 森下山菜

渡良瀬や葦が煙と化す野焼
魂の野火走りゆく遊水地
花の無き庭の草地在春を待つ
やつと顔出す亡夫好みし露の臺
伽羅路の試食味よし道の駅

杉戸 佐々木史女

ふり仰ぐ蠟梅の香や昼の月
牡丹雪みるみる消ゆる深敷
斑雪鴉はがれて飛び立ちぬ
我に棲む鬼退散の豆を打つ
眼帯をとれば春塵明らか

本橋稀香

紅の椿を描き寒見舞
冬萌や弥勒菩薩の微笑みて
うつしよの闇に艶めく寒椿
遥か嶺真白き朝や雪割草
道草の靴の運びぬ春の土

熊谷 越田栄子

春浅し園児の部屋にランドセル
春疾風モンローばりの女学生
浜千鳥ひねもす波と戯れぬ
求人への貼り紙破る春一番
花辛夷八十路の坂を上がり初む

反町 修

店先に手染の暖簾春近し
園児らの土手ころと春隣り
土手青む橇と化したるダンボール
マネキンの着替え見てる春時雨
初蝶や明日入院の吾と戯る

さいたま 梅澤輝翠

新大関の笑みは決意ぞ春遅し
春の海喜びのせて定期船

鮮やかさ吸ひ込まれゆく花ミモザ
萎ゆるなよ霜おく朝の畑野菜
ホルンの音ひびき合ふ村辛夷咲く

冴返る箱根関所の石畳

時の鐘冴返へりたる城下町

美術館出で現代に春時雨

野ざらしの長谷の大仏春時雨

髻結へぬ関取暴れ初場所を

伊勢海老や甲冑まとひ躍り出る

獅子舞ひ来戸口の隅で固唾のむ

初氷桶に赤い実閉ぢ込めて

水面鏡白雲つつく子等の声

初東風や沼の匂ひと貸ボート

復興を祈る漁港に春の雪

啓蟄や奈落迫り出で花道へ

春眠やうつらうつらと五七五

水底の素早き魚影雨水かな

春の鳥月の探查機動き出す

さいたま 西幅公子

長兄の声うらがへる節分会
節分やベッドの友へ甘納豆

黒門の太き門梅一輪

故郷の山城恋し春霞

ビー玉のあやしき光春浅し

さいたま 飯田忠男

竹澤和子

また一つ星の流るる枯木宿
寒明やコンフレックふやかしぬ

寒紅を引けば決心つきにけり

春待つや忌明けの扉押し開けて

春浅し和菓子に透ける浅緑

加藤でん治

寺町知子

節分や見えざる鬼に豆を打ち
振り向かず会場へ消ゆ受験の子

馴初めを語り合ふ夜老いの春

こぼさじと左手を添へ鶯餅

鶯餅声の綺麗な女店員

若狭 山崎郁子

綿引まりこ

長ぐつの赤の鮮やか雪解水
下萌や思ひのほかの色の濃さ

下萌や苦しき恋もせし記憶

下萌や何かあるらし雀群る

下萌や端布繕りたる鼻緒ゆく

牧方 寺内洋子

観客のマナー違反や春嵐
看護師の採血下手に冴返る
招待の客居坐りて冴返る
汚染水の人為的ミス冴返る
外壁をのた打ち回り春一番

さいたま 山戸美子

老教授の胸に深紅の冬薔薇
門柱を越えて孤高の冬薔薇
風花や無人駅舎の小座布団
風花や四辻に残る荒物屋
春浅し館のはみ出す人形焼

さいたま 森美枝子

公園に先客のあと雪の朝
春の日や駄菓子の中に当たりくじ
春の日や振子の長き大時計
春の日やまだ眠りたる村ひとつ
春の日や動かしてみる砂時計

石関六弦

色つばき黒子美人や針供養
口紅は血より濃き紅春一番
浅き春美脚の人ゐる二番線
春浅しバスを待ちたる美脚かな
踏み出しはいつも右足春一番

川口 木村小麦

早朝の散歩二の足冴返る
眺め遣る秩父連山冴返る
打上げの木の芽田楽まづ一献
記念日の紅梅見ゆる席に座し
近道は墓地裏の道落椿

森 和子

遠く来て春一番に身を任す
春一番たちまち信号渡りけり
跳ね上がり風とざわめく桜魚
水の湖の公魚恋ふる空の青
柴又の草餅美味しことさらに

新井のり子

風に乗り息の伝はる風の糸
ゆるやかに囁き始む雪解道
父母の薄らぐ記憶薄氷
つづら折り春の渚を垣間見て
鳴り通す雛祭の日のオルゴール

若狭 岡本祥子

農夫らの水路掃除や春近し
寒明くる寺に祈願のをんなあり
立春の幡翻る塔庇
塔頭に流るる声明寒明くる
のんびりと和む読み手の歌留多かな

利根 倉田星歩

里山を遊ぶ雉あり村静か
艶やかな雉の雄叫び山に消ゆ
壇上の椀の響きや宵の春
「お元気で」心揺さぶる春の日や
春の日や旅立愛づる風の音

さいたま 鈴木香音子

梅見の歩古木の前に緩みをり
幌付けて押す乳母車浅き春
肉球に触れさす猫や春うらら
学帽を目深に被り大受験
卒業式あの子に渡す金鈿

さいたま 鈴木藻好

無人駅から田園の道冴返る
関ヶ原合戦の跡のどかなり
苗を植ゑまさに恵みや春時雨
子らが扮する白狐の雅楽午祭
冴返る人影のなきグラウンド

森下美智枝

春浅し深きカップのミルクティー
藪椿大樹となりし半世紀
春寒し思案に暮るるクラス会
苗札の絵に収穫の日を思ふ
女子校の乙女椿は大らかに

綿貫ひさの

廃車場は猫の住処に下萌ゆる
初めての孫の受験や神頼み
食ひ荒らす野鳥の群れや下萌ゆる
靴おろし鼻歌消ゆる春時雨
春時雨誘はるるままコンサート

小川洋子

来客を見送る夜空息白し
帯締めて気も引き締めて春着かな
扇状の白一色や梅の里
湖を眺むる地藏六体梅の花
人影に散らばる池魚や春の庭

若狭 畠中八重子

土匂ふ花壇の手順活き活きと
歛磨く母の口癖土恋し
そろそろと田畑見回り春の土
吐く息の少し温みて雪割草
ペットロスのトンネルの先雪割草

緒方みき子

いぬふぐり古事記ゆかりの道を行く
三輪車取り合ふ子らへ春日さす
春寒やリレー走者の細い足
常緑の葉に隠れたる木の芽かな
山盛りのフルーツポンチ雛祭

さいたま 鈴木敦子

梅の香や母の忌日の泣き笑ひ
春愁や峡の里にもネット記事
「主婦」役ははまり役なり春動く
右左いつも逆な子春の靴
啓蟄や放棄の田んぼ沼田となり

若狭 松村笑風

春の日や路地いつぱいの電車の絵
春の日やくしやみのうつる老ふたり
犬猿と喧嘩別れの雉の声
春愁や友の生花招待券
春風や改札抜くる旅鞆

さいたま 羽鳥秀子

春の鳥モンローのごと歩みをり
しばらくは頭傾ぐる春の鳥
炊き出しのけんちん汁や春浅し
重馬場やしぼし試練の春の雪
オペラ座の幕間のシェリー白椿

さいたま 秋谷風舎

末黒野や青き小鳥と白き鳥
猫柳べにさしゆびに鎖きぬ
女生徒の風踏む素足寒の明け
胸に秘めたる散華の君や花吹雪
老木の枝先ぶくり寒の明け

吉川 杉浦千祐

鳶の輪の美なる旋回風光る
年寄りに適ふ小昼や桜餅
正論も異論もありて春炬燵
山門に咲きて麗し梅古木
百薬に優る晩酌おぼろ月

香田裕誌

特選の習字まねる子春近し
マラソンや向かうの土手の下萌ゆる
下萌や羽根あるものは飛び立ちぬ
久闊の友会ひたしと夜の梅
ぶらんこや半寿の力試すなり

和歌山 南條さわゑ

寒梅やベンチにいつも同じ猫
時刻表に数多の付箋春を待つ
二杯目の酒はホットで春浅し
冴返る暁破る計の電話
田楽や味噌も本音もこぼれけり

大熊健司

山里にバス待つ女春シヨール
今年こそ母の形見の春シヨール
小抽斗開けては閉ぢて春ひと日
長閑なりさらさら流れ用水路
朝ぼらけ広場まつ白凍てついて

さいたま 鳴海順子

絵とならば美しき街春の雪
花一輪咲いて待たる春一番
わかさぎの揚げたてで買うて家路かな
美しき袂をぬらす春の雪
春一番おあづけとなる高气压

川口 田村福美

妖花なり熱海桜てふ桜なり
幼名で呼ぶクラス会春の園
箸置きに蕾付きたる梅小枝
点滴のやうに椿の落ちにけり
他人づてに君の消息花筏

さいたま 小山あつ子

妻の座に居座り四温日和なる
初午や年相応の折り財布
寡黙なるひとの教壇風信子
耕人の筋骨心の太さかな
韋駄天はまづ前を向く寒の明

大阪 遠藤人美

寒稽古畳正座の子供達
寒稽古竹刀の響く校舎裏
面とれば可憐な少女寒稽古
春寒しかけ足で行く定時制
下萌ゆるよちよち歩く吾子の笑み

武田重子

鬼やらひ宝投げ待つ人の波
薪に線炭で描き入れ福は内
春浅し帽子をぐつとかぶりけり
厚き葉を押しつけ椿咲きにけり
上を向き己を見せて落椿

さいたま 小駒さち子

訪ひて今日覚めけり冬すみれ
水温むとも沈黙の池に影
マンホールの蓋黒々と春の雪
「お早う」と走る声して春来たる
米を研ぐ手の平赤し水温む

東京 柳父はる

椿散る扇ヶ谷のやぐら脇
落椿熾火のごとく光りをり
春浅し常設展は人疎ら
湘南の海見下ろしつ椿呵呵
野仏に椿ひとつの供へかな

横山礼子

藤岡 加藤ナヲ子

畑のすみ一步前進ふきのたう
早起きの雀の声よ二月かな
紅白の梅の香りよ細き道
雨上り出番今とかき菜かな
きさらぎの風にとまどふ子猫かな

朝陽浴び涙ぐみたる雪だるま

スニーカーざくざくと踏む霜柱

節分や豆強く打ち「鬼は外」

冴返るブロンズ像に父の愛

梅園やゆつくりまつたり時流る

東京 畑宮栄子

さいたま 駒谷行雄

のどかさや猫は日の暮れ待たずして

新築のとんとんとんや春浅し

春浅し脱ぎたる靴下見つからぬ

花椿ブローチのごと光りけり

椿咲く島へ船笛入港す

さいたま 樋口元美

蛭田律子

花殻をやさしく摘む手春入日

ふうわりと春日の中のベビーカー

求愛の決意の顔や雉鳴けり

梅が香に蜜吸ふ鳥の集ひたり

昇進や板場に届く桜鯛

岡田芳春

若狭 佐野友夏

稽古終へ寒気の緩む武道場

我先に飛び立つ瑠璃や春の鳥

いぬふぐり目立たぬやうに目立つやうに

春来たる勝負は直球いさぎよく

一言に心ほどけて春の雪

川島夕峰

東京 山中いちい

枯木の先そつと未来を育てをり

目と鼻に春は間近と告げ来たり

露の臺早や三度目と北の友

一朵落ち山茶花と知る抜け小路

山桜枝がゆるりと空を向き

亀鳴くや生成りの風の朝ぼらけ

春ふはり土手の草間に雀じやれ

透くる陽に絡む白き根ヒヤシンス

競走馬のギャロップ軽し日脚伸ぶ

枝はぬる囀だけの朝戸開け

封じ手を指す指先に春の色

春光や拳に誓ふ若き獅子

春光と湯気につつまれ走る人

残雪の山門くぐり襟正す

ありし日を偲びて通ふ梅の路

あどけなき制服の群れチューリップ

子らの声絶えし学舎チューリップ

煩らひもあれどすつくとチューリップ

襟立つる風の中にも春の匂

春光や坂の上には八ヶ岳

北限や音の幽かに夏の潮
白蓮の花にあなたが揺れてゐる
斑猫や武蔵野平野弁ふる
容赦無く禿と言っちゃう子供の日
母さん似皆んな明るい燕の子

所 沢 関根千恵

下萌と枯れゆく影の交差かな
野水仙積もりたる闇押し上げて
ブロンズに辿り着くまで枯蓮
風叫ぶ鳥も見守る木守柿
師の便り言の葉しむる染み大根

大 阪 飯塚智恵子

浅春や菜園隅のシヤベルかな
河沿ひを往く人まばら春浅し
訪ふひとを迎ふる邸や山椿
やぶ椿山頂の神守ること
柚道の笑ふ羅漢や落椿

さいたま 前田夏野
(英子改め)

お湯割りの備前焼持ち冬ぬくし
霜焼の頬痒くても笑顔の子
「お帰り」と母の摩る手冬ぬくし
初午の太鼓つけてん茶碗酒
キューボラの火入れ赤赤一の午

さいたま 北山建治郎

磁石持ち出し無言の行や恵方巻
九十五歳声張り上げて「福は内」
独り居のお茶漬うまし春炬燵
風折れの水仙一輪寢室に
もがり笛独りになりてその音を

藤 沢 小島喜代子

木の芽張る満開前の大仕事
とんがりの木の芽に託す我が行方
蠟梅の馥郁宝登山の記憶
宝登山や蒼天黄花残る雪
公園へ親子を誘ふ春日向

小田三茅

寒稽古背筋を伸ばし男舞
三味線の指先赤く寒稽古
三味の弦調子合はせて寒稽古
踏切の響きかんかん冴返る
改札に待ちをる娘赤コート

さいたま 湯浅 和

獅子舞のかかかん吾子のわーんわん
冬の夜同期肩組み兄弟船
一輪の紅梅浮かぶ湯船なり
立春や野球キャンプの始まりぬ
フルマラソン七年越しに美酒の春

平野久夫

上りゆく冬満月に君を見る
テレビから凍のきはまる能登の町
小春日に俺と愛犬大あくび
一年があつといふ間に梅の花
幼児の遊ぶ砂場や初桜

東京 桐山遊童

窓開くる朝の庭木の芽吹きかな
買物のいつもの道や木の芽風
母からの見やう見まねの木の芽和
春の雪隣家の犬の吠ゆる声
声高に話す客あり春喫茶

さいたま 高原和子

松過ぎや珈琲店の鳩時計

さいたま 石井直子

二歳児の二礼二拍手節分会

藤岡 榊原聰子

春浅し古民家カフェの石灯籠
湯畑やキャリーケースに春の泥
立春や道にチヨークの花模様
春光や太き柱に手斧跡

ふはふはと音なくふはり春の雪
春めきて小川の流れひかりけり
受験子へ幸運の気を送りたし
幼な子も愛犬もめて豆をまく

能登の地の仮設住居や春浅し

木谷葉子

八ヶ岳へ旅の三婆冬暖か

さいたま 北出久美子

足し算の医療明細春浅し
春浅し端切れを集めミシン踏む
古本の掘出し物や春めきぬ
天ぷらは母の出番や露の臺

陽光に仔猫の腹や冬ぬくし
出張帰りの我家の灯り冬暖か
霜焼に食ひ込む指輪祖母愛し
霜焼も生きゐる証と笑ふ祖母

春浅し窓を磨いてティータイム

三浦真由美

ああ無情けんもほろろな雉の声
雉独り花散り敷きてほろろかな
雉は鳴く独りよがりと嘲られ
春の日はちよいと一杯温爛で

草加 持永喜夫

路の臺夕餉の皿に花開く
山好きの友や目聴く露の臺
風も善し雨も善しとし青き踏む
春泥や畔も田圃も黒々と

春の日や名さへ忘るる昼時分

初午の太鼓笛の音白狐の面
ミモザ咲く天才棋士の微笑みに
クレヨン画飾りオルガン踏めば春
如月や祖母の遺せし句集繰る

宮代 関谷多美子

寒鰯にちびりちびりと独り酒
力士まく福豆受くる手と手と手
百粒の福豆前に戸惑ふ媼
風折れの水仙吾子の髪かざり

和歌山 嶋田洋子

溪の音夕日に輝く山椒の芽
たいまつと走る半てん野焼かな
声かくる昏き縁側木の芽和へ
二十一忌の姉に供ふや木の芽和へ

さいたま 山下ユリ子

春浅しオカリナに聴く宗次郎
蘂や項羽劉邦ゆめのあと
キーホルダーは椿の種よ名入りなり
暮るるまで庭の刈り込み春浅し

糸井しるく

串並べ白味噌香る田楽に
道の駄ダウン装ひ冴返る
田楽や母腕自慢懐かしい
住職の更紗も替はり冴返る

さいたま 落合和枝

山を背に生業ひとり雨水かな
庭先の手入れ遠のき雨水かな
婚活や右往左往と春の鳥

篠原さよ子

妻の手を引きて鎌倉八十の旅
父母よ五人の御子は秋三人に
初孫や妻の背に勝ち秋笑ふ

藤沢 藤田寛二

東京 深沢りこ

ひきこもる人に届けむチューリップ
チューリップ落花のとき待つ茎まげて
春日浴びクレオン伸ぶるや我が頭上
空を見て憂ひとばすよチューリップ

主宰が添削をしている句があります。
提出した句を思い出して勉強して下さい。

作品評

山本鬼之介

鉄瓶の猛る湯玉や寒の明け 菅原卓郎

右の句を一読して先ず浮かんで来たのが気風の良い作者の人物像で、次に頭を過つたのが、文部省唱歌の「村の鍛冶屋」であった。

冬の厳冬期を過ぎて春へ移行する微妙な季節感を暗示する季語「寒明け」と、人の営みを明示する鉄瓶の湯気との組合せによって、明確で趣のある俳句が書かれている。「しばしも休まず 槌うつびびき 飛散る火の玉 はしる湯玉」と、つつい「村の鍛冶屋」の歌を口遊んでいた。南部鉄のがつしりとした鉄瓶に湯が滾り、蓋がかちかちと勢いよく音を立てている。そして、頂点に達した湯が湯玉となって飛び散っている。実に臨場感の溢れた俳句である。

公魚の釣れぬ時間の至福かな 新 曆文

一読してなんとも不思議な俳句である。公魚釣りは未経験であるが、鱒釣りを経験した筆者にとつては、釣り糸を垂ら

す度にどんどん釣れるのが至福の時間であった。公魚釣りの名人ともなれば、釣れるのが当り前で、傍目で見ると愉しいものではないのかも知れない。たまには釣れぬこともあって、糸を垂れつついろいろなことに思いを巡らせている時間が愉しくまた貴重なのかも知れない。釣堀で掛かった魚を放しながら日がな一日過ごしている釣り人と同じかと思う。

雨粒を染むるほどなり花ミモザ 菅原真理

通称のミモザは、羽状の葉が銀色に見えるアカシアの一種である銀葉アカシアの仏蘭西語名だそうで、黄色の集合花が多数集まって花房をつくっている。南フランスで盛んに栽培されているそうで、その花名からお洒落なイメージが伝わってくる。作者はある時ミモザから、その花を濡らす雨が黄色く染まってゆくような印象を受けたのであろう。花の名とともに花の形からもその形容が相応しいように思う。

ちなみに、水明俳句会に「ミモザの会」という句会がある。田園都市線あざみ野駅近くのアートフォーラムという瀟洒な会館で、十余名の女性会員がのびのびと俳句を楽しんでいる。

春光の届くや半跏思惟の像 阿部幸代

弥勒菩薩半跏思惟像は、仏像の一形式であり、その形は、台座に腰掛けて左足を下げ、右足先を左大腿部にのせて足を

組み（半跏）、折り曲げた右膝頭の上に右肘をつき、右手の指先を軽く右頬に触れて思索する（思惟）姿の弥勒菩薩像である。京都広隆寺や奈良中宮寺ほか各所に安置されており、六〜七世紀に朝鮮から渡来したもので飛鳥や奈良時代に日本で作られた価値の高い仏像である。

拝観してうっとりする魅力ある仏像と、其処に射し込む春の微光とが醸し出す雰囲気がい佳い。

島の風はらみ椿の咲き溢る 岡田宣子

言わずと知れた伊豆大島の椿であろう。島の随所に見られる椿。その椿の花を渡る風は島生まれで優しい。島の風は椿にとつての育ての親であり、椿を優しくそして時には厳しく育んでゆく。満開の時季を迎え、木々の枝が折れんばかりに咲き満ちた椿である。

三寒の四温となるや明り窓 小林京子

三日ほど寒い日が続いた後、四日ほどやや寒さが緩むという冬期の気象を表した三寒四温であるが、キッチンや寝室あるいはアトリエなどに設けられた明り取りから射し込む光によってその違いを敏感に察知することなのであるか。明り窓という具象物によって、抽象的な気象現象が形をなして見えてくると云う感覚の鋭い俳句だと思う。今年立春後

もこのような気象が繰返し、そのお蔭で昔のように入学式の頃に桜が満開になった。

春シヨール旅の疲れがこぼれ落つ 篠崎紀子

旅に出る前の心の弾みとは裏腹に、終って帰宅した時の安堵感とそれに伴う疲労感は旅とセットになっている。旅衣が洋服であれば春マフラーかと思うがそれを外した時の疲労感が「こぼれ落つ」によって伝わってきた。

四季のある国の由緒や節分会 山岸久美子

節分は、季節の移り変わる時すなわち立春・立夏・立秋・立冬の前日を意味する言葉であるが、一般的には豆撒きの行事を行う立春前日の節分が節分会として定着している。少なくとも昭和の時代には日本の四季は明確であり、四季それぞれの生活上の趣と楽しみがあったが、地球温暖化による気候変動の産物か、わが国の四季が曖昧になり、やがて夏と冬の二季になるのではないかなど、驚くべき会話が為されるようになった。作者は、俳人として歳時記を通じて日本の四季とそれに伴う行事の由緒や来歴などを識り、日本人としての誇りと悦びを感じているのであろう。将来に不安を感じながらも、豆撒きの行事で春の到来を感じ取ってという。

色を食べ音を味はふ水菜かな 元田亮一

京都の九条において肥料を使わずに水だけで栽培していたので「水菜」と称するそう、関東では京菜と言われている。菜物の乏しい二〜三月に出回り、淡緑色の色の美しさとしゃきしゃきした歯ざわりが好まれて漬物・煮物・お浸しなど、愛好者が多い。掲句の通り作者も水菜ファンの一人なのか、洒落な表現で水菜を紹介している。今夜も水菜の漬物で軽く一献というところか。

初場所や瓜実顔の厚化粧 池田珪子

国技館で開催される一月場所で、場内にはまだ正月の気分が残っている。土俵に近い棧敷席に座を占めた綺麗所であるか。瓜実顔は美人を形容する言葉であるが、それにつづく厚化粧が前言を否定している。テレビで大相撲を視聴していたままたま眼に入ったのであろうが、作者の正直な心が顕れていて面白い。

立春の枕カバーの白さかな 吉川拓真

立春とはいえ、実生活においては、着用する衣類や寝具などからまだまだ冬の感が強い。しかし、身の回りの自然環境などからなんとなく春の近づきを感じる二月である。

掲出句からは、洗濯したばかりのぱりっと糊の効いた枕カバーが見えてくる。そのカバーに頭と顔を載せた時の爽快感は、筆舌につくし難いものである。作者は、立春を清潔な枕カバーを通して肌で感じ取っているのである。

雨しめやかに紅迫る青木の実 霜多光代

庭に細やかな雨が音も無く降っている。真っ赤に熟した青木の実が、雨に濡れて紅色を一層輝かしている。「雨しめやかに」の導入フレーズが見事な演出効果をもたらし、その場の雰囲気を読み手に伝えている。なかなか味わい深い俳句である。

幻覚か隣に夫も日向ぼこ 清水桂子

冬の陽射しで温もった縁側の安楽椅子での読書は実に気持ちよく、知らず知らず時間が過ぎてゆく。隣にいる夫から声を掛けられたような気がして横を向くと、そこには誰も居なかった。読書中というとうとうとして夢を見ていたのか。夢とか幻覚だと思ってしまうには余りにも現実感が濃く、不思議な体験であった。お二人揃って日向ぼこをしておられた頃のことを想像し、勝手な解釈をさせてもらった。

春眠てふ贅沢愛づる自由人 皆川更穂

「春眠曉を覚えず」の慣用句が示す通り、暖房も冷房も要らぬ春季の就寝は実に気持のよいもので、ましてや、永年勤め上げた仕事から解放され、残された人生を趣味に傾注できる身となれば、春眠は金のかからぬ贅沢そのものであろう。自由人の三文字にその気持が凝縮している。

手入れするひとなき庭の黄水仙 丸屋詠子

各地に空き家や空き屋敷が増えていると聞くが、まことに勿体ない気がする。掲句の庭もそのような状態にある家の庭か、居住者は居ても高齢のため、又は、病床に臥していて手が回らないなど、それなりの理由がある家であろうと想像する。草がはびこり木々の枝が伸び放題になっているが、季節の花である黄水仙が道行く人にその存在感を示している。

春シヨールたたみて受くる小盃 森下山菜

得意先の接待を無事に終えて、料亭の小座敷でちびりちびりと独酌している男客。招いた馴染みの芸妓が部屋に入り、春シヨールを手際よく畳んで座につくと、「まあ一杯」と男が小振りな盃を差し出す。このように粹な場面を想像しつつ

この句を楽しませてもらったが、さてその後の成り行きが気になる。次回にこの続きを一句ご披露願いたい。

我に棲む鬼退散の豆を打つ 本橋稀香

筆者が思うに、人それぞれに表の人格とは別の人格が存在しているような気がする。それが三人も四人も居たのでは多重人格者の烙印を押されてしまうが、陰の人格が一人か二人なら表の人格が制御できそうに思う。掲句を読んで、その内容が筆者の思いに近いもののように感じた。

求人 の 貼り紙 破る 春 一番 反町 修

どの業種も人手不足で、街には求人 の ビラ が 沢山 貼られて いる。求人側が 手間暇 を かけて 貼った ビラ を 春 一番 が 冷酷無 惨に 破り 去って ゆく。市井 における 一場面 を 上手く 切り取っ た 臨場感 の ある 俳句 である。

幕末を思ふ梅見の偕楽園 千坂平通

水戸市にある偕楽園での観梅に、さぞかし満足されたことであろうが、幕末の歴史の一端である水戸藩の藩士が関係した天狗党の乱や桜田門外での井伊大老暗殺事件などを思った時、作者の心の中に複雑な思いが去来したのではないか。

渡良瀬や葦が煙と化す野焼 佐々木史女

大人の背丈をはるかに凌ぐ葦の群生を、忽ちのうちに煙にしてしまう野焼の迫力がもの見事に詠まれている。

水琴窟

(三月号鑑賞)

池田雅夫

枯芝に軽き足音夕陽射す

竹澤和子

「枯芝に軽き足音」に、何か気持ちがあふつきた快さが窺える。もの寂しい枯芝であるが、反面、日の当たる枯芝は暖かそうである。そういう意味で「夕陽射す」の場面設定、状況が効果的で、映像として目に浮かんでくる。

凧に飛ばされさうな昼の月

湯浅和

「昼の月」は二十三夜以後の真夜中に出た月が朝あるいは昼にうつすらと残っているか、三日月のように昼過ぎてから昇ってくる月である。太陽の明るさでほとんど気づかないでいる。「凧に飛ばされさうな」は実景として共感する。

膝掛の過去の温みを手繰り寄す

新井のり子

「膝掛の過去の温み」に趣がある。永年愛用している膝掛のほんのりとした温もりに過去のさまざまなきこしをふり返っているのだ。あたかも「手繰り寄す」かのように。

風邪薬多めに置きて薬売り

岡本祥子

その昔、「富山の薬売り」は全国各地に赴き、置き薬として売っていた。農作業が一段落した冬は「風邪」の季節。そこで「多めに置きて」という訳である。富山の薬売りは、紙ふうせんやゴムふうせん、箸などを置いていってくれた。

冬の空飛行機雲の真つ直ぐに

大島千恵

「冬の空」は、日本海側では重い雪雲で覆われていることが多い。一方、太平洋側は晴れの日が続く。澄みきつた青空に「飛行機雲が一直線に伸びている。時間が経つにつれて飛行機雲がふくらんでゆく情景を詠むと、より幅がふくらむ。

すらすらと九九の響きや小春空

川島夕峰

小学校の低学年で習う「九九」。学校の行き帰りに繰り返し誦じたものだ。五の段、六の段を過ぎるとだんだん難しく感じてくる。「すらすらと九九の響きや」には子らの明るい表情が表れている。そして「小春空」が巧みに重なる。

病床に届く厨のおじやの香

北出久美子

自宅での療養であろう。経過が少し良くなり、食欲が戻ってきた。そこで「おじや」を作ってもらったのだ。その香りに空腹を感じ、お腹が「グー」と鳴ったにちがいない。

一歩づつ踏みしめ歩く枯野かな

南條きわゑ

荒藜と広がる「枯野」。来し方をゆつくりとふり返っているのだろう。夏の草木の勢い、秋の充実を経て今はその名残りの茎もすっかり枯れてしまった。そこに人生を重ね合わせ、「一歩づつ踏みしめ」ている。「歩く」を推敲したい。

洗ふ手に洗ひ残しや十二月

遠藤人美

「洗ふ手に洗ひ残しや」から、師走のあわただしさ急がしさが感じられるのだが、冷たい水のせいかも知れない。いづれにせよ「十二月」の季語がしっかりと捉えられている。洗い残しに着眼している発想におどろかされた。

ラグビー戦たられば論議果てしなく

香田裕誌

勝ち負けがはつきりするラグビー。「:だつたら」「:れば」と後悔ばかりが口をつく。男性的な冬のスポーツとして人気が高い。あのとき「:ならば」と、競技者はもちろん、観戦しているファンの心理にも共通するものである。

初鏡 決意新たに眉きりり

松村笑風

新年になって初めての化粧。改まった年への「決意」、覚悟が伝わってくる。念入りな化粧に表情が明るくなり、より若くみえる。仕上げに「眉」を書き、気をひき締めている。

山茶花や素焼の鉢を選びけり

飯室夏江

晩秋から初冬にかけて咲く「山茶花」はどことなく寂しい。「選びけり」と潔く詠んでいるものの、「や」「けり」の併用は避けたい。花の少ない時期に咲く山茶花の品種は紅や白など種類が多い。「素焼の鉢」には雪白の山茶花であろう。

出納の帳尻合はぬ霜夜かな

篠原さよ子

一日の終わり、あるいは一週間、一ヶ月の統計額を帳簿に記している。計算の細かな数字が合わない。何回も何回も計算し直してみるが、そのたびに数字がちがつてしまう。それは、ひしひしと寒さが身に迫る「霜夜」のせいかもしれない。

獅子柚子の福を呼びたる面構へ

石井直子

「獅子柚子」は「おぼけ柚子」とも言われている。桁外れに大きく厳つい。味はよくないのであまり食さないようだ。珍しいので玄関とか店のカウンターなどに置かれることが多い。「福を呼びたる面構へ」には、いかにもと共感する。

一輪の花を愛でるや年の暮

小田三茅

冬の花で「一輪」が似合うのは、やはり「冬薔薇」であろう。山下さがりの句に「冬薔薇一輪切りていと小さし」がある。高浜年尾は「佗助は一輪ざしに似合ふもの」と詠んだ。

大村節代 選

鼓
笛
集

春の田の余白埋め行くトラクター
春昼の舌でころがす変り玉
遅き日の書肆に改訂時刻表

菅原卓郎

明日にでもほどける気配山櫻
古里は辛夷咲く山その向かう
花びらも共に胃袋コップ酒

嶋田洋子

「必勝」のはみ出す絵馬や牡丹の芽
矢舁にブーツを鳴らし卒業す
目で歌ふ越路吹雪やミモザ咲く

森美枝子

春の炬や真紅の傘へ白きもの
一汁は佐渡尖閣の新若布
春遅遅とドライブインの伊勢うどん

池田珪子

若き日を辿る春宵橋灯はしあかり
外濠の端行く電車風光る
白髪に赤いボシエット春の風

阿部幸代

蒼穹やジュラ紀のごとく土筆生ふ
春の雪足湯楽しむ異邦人
野遊やシャトル打ち合ふ子供たち

反町 修

卓球のラリーの続く春日かな
ラケットを磨く泡足す春の夕
更衣室へこみし球と花の塵

吉川拓真

生命の力あふるる花椿
咲きほこる椿に吾も意気込めり
花椿夜目に明るきシャンデリア

山岸久美子

白梅やすき間を埋むる青き空
亡き夫に香華を手向け春惜しむ
齡百まで花にときめく心かな

飯蛸をあてにふるさと自慢かな
観梅や蜜吸ふ鳥の見え隠れ
元気でねうさぎにも言ひ卒業す

葛城の山路の口の西瓜売

薫風の棚田の明日香ころの地
夏の果なにやら寂しセルフレジ

段段に起こす棚田や春の浜
春の冲豪華客船ゆらゆらと
春の海つらつら思ふ妻の艶

亀鳴いて主長寿あそびとなりにけり
菫咲き追憶の想ひ浸りけり
路の臺地蔵の傍を離れずや

背を西にやつと定まる春の蠅
羽たたきに透ける土色初蝶来
本心は秘して触らず茨の芽

佐々木史女

湯浅 和

秋谷風舎

北山建治郎

南條きわゑ

遠藤人美

初写真横に遺影の若き夫
花壇から摘み取る花葉教卓へ
梅見るや老樹の幹に吾の人生

蝌蚪の紐昔話の語り部に
あぜ道の長き葬列春夕焼
泥水に靴をとらるる春の闇

鼓笛集作品評

大村節代

春の田の余白埋め行くトラクター

菅原卓郎

春になつても、まだ冬を引き摺る田畑。その田畑を大型のトラクターが動き回る。耕うん、肥料、種の散布や草刈り等等。あらゆる農作業を行なうトラクターは、人手不足の農家を補つて余りある、力強い助っ人である。
中七の表現通り、春から夏へ向かつて、青々とした田が出現する事だろう。

花びらも共に胃袋コップ酒

嶋田洋子

今年の春はいつまでも寒く、桜は仲々開花せず、日本中がいまかいまかと待っていた。四月に入つてやっと開花して、

入学式に間に合ったとか。遅い桜の開花を喜び、花の舞う日の花の下で、お弁当を広げたのだろうか。花びらの浮くコップ酒が臨場感があっていいですね。

矢絣にブーツを鳴らし卒業す 森美枝子

大学の卒業式に、振り袖に袴を着るようになったのは、いつの頃からだろう。近頃は大正時代の女学生のような矢絣の着物と草履ではなく編上靴、正に大正の女学生を彷彿させる中七のブーツを鳴らしが、現代っ子が踊躍し、闊歩する様子が伝わる。

鼓笛集巻頭（四月号）

私の好きな一句（自句自解） 霜多光代

冬桜見詰むるほどに青く澄み

鬼石町の冬桜は公園に広がり一重の花は儂なげに、しかし凜とした気品に溢れていました。花片は青空を透かし、透明に極りなく近いブルーでした。

素晴らしい光景に、心が震え感動のひとつときでした。

第25回NHK 全国俳句大会

山田 佳乃 特選

自由題一席

石川 理恵

溜息をかたちからすうりの花

評 烏瓜の花は夕暮れから夜に咲き、その花卉の先は白いレース状になっていて不思議な妖しさを持ちます。まるで溜息の様という描写が詩的であり、花の姿を上手く表現されていると思います。八音の花の名を十七音のリズムに溶け込ませて印象的な句となっています。

「第二五回NHK全国俳句大会」の題詠「平」と自由題をあわせて、三二、四七五句の中から山田佳乃特選に、水明季音花欄作家石川理恵氏が選ばれました。おめでとうございます。

網野月を選

山紫集

春浅し向かう三軒空家なり

地震見舞ふ妻に訛や浅き春

春浅し山巖つんと自己主張

指先が探る浅春電子辞書

春浅し光に晒す腕時計

保護猫のじやれつく指や春浅し

廃屋の石に昔を春浅し

煌煌と消えぬ外灯春浅し

春浅し憂ひほのかに増女

春浅し素直になれず頬ゆがみ

日だまりに摘み菜の子らや春浅し

春浅し積読と言ふ読書かな

慰めの言葉よりパフェ春浅し

勿来の関の小径の歌碑や春浅し

春浅しぼんやりにじむ朝の虹

春浅し噫マエストロ・セイジ逝く

春浅し地下水脈の微かなり

上戸千津子

樋口元美

大場順子

川島夕峰

——以上特選

西幅公子

野口和子

野田静香

野村美子

畑宮栄子

原田秀子

日高道を

春浅し待合室の膝小僧	檜鼻ことは	春浅し骨董市の黒電話	元田亮一
春浅し薄荷のど飴鼻をつく	福田千春	戦止まずよ浅春のイマジン	本橋稀香
太陽に両手をかざす浅き春	保坂翔太	春浅し貝の香りの中華粥	森 和子
春浅し阿吽の息の合はぬまま	曲淵徹雄	瀬がしらのきらめき躍る浅き春	森川義子
二度寝する暁の色春浅し	正木萬蝶	燃えた家のこげた柱や浅き春	森下美智枝
浅春や大音量の販売車	町野広子	浅春の折鶴ふつと飛ぶ気配	森美枝子
溪流の鈍き水音春浅し	松宮保人	老いの身を叱咤激励春浅し	山岸久美子
春浅し花袋旧居の四つ目垣	松本光子	奥入瀬の水やはらぎて春浅し	山下ユリ子
指先は冷たきままの春浅し	丸屋詠子	友逝きし慣れしチャペルに春浅し	山中いちい
春浅し兜太の鯨や今いづこ	丸山マスマ	滑り出すヴァイオリンの音春浅し	湯浅 和
春浅し瑠璃にしたたる結露かな	宮崎チアキ	半袖の看護師凜々し浅き春	横山君夫
峠茶屋おでん甘酒浅き春	持永喜夫	春浅し昭和の地図の机上旅	横山礼子

意識なく石蹴る足や春浅し	吉川拓真	春浅しふくら雀は電線に	井上玲子
初打ちのティーに緊張春浅し	青木鶴城	蝶結びのシフォンスカーフ春浅し	内田恵子
湖風の唐橋越しや春浅し	秋谷風舎	春浅し新幹線の往路のみ	梅澤輝翠
湯宿より匂告ぐ便り春浅し	新 曆文	ロシアンティーの香りの向かう春淡し	梅澤佐江
玉筋魚のくぎ煮淡路の春浅し	阿部幸代	浅き春小舟の浮かぶ蔵の町	岡田宣子
浅春や熟年離婚を告ぐるひと	荒井俱子	春浅し浅瀬に卵らしきもの	加藤でん治
石垣のつたふぬくもり浅き春	飯塚智恵子	京菓子の甘さ程良く春浅し	熊倉千重子
春浅し紅茶にたらずブランドー	池田珪子	手の甲に青筋二つ春浅し	河野はるみ
みつうみに浮かぶ波の穂春浅し	池田雅夫	春浅し清掃車にて道整備	小駒さち子
先づ夫に告ぐる吉報春浅し	石川理恵	スキップのちよつとちぐはぐ春浅し	越田栄子
自販機の汁粉押す指春浅し	石田慶子	鈍色の能登の荒波浅き春	小林京子
佛塔の影の長短春浅し	井上燈女	春浅し母の遺影はすまし顔	小山あつ子

浅き春蹴球児らのひびく声	榊原聰子	たかが趣味されど生き様浅き春	杉浦千祐
春浅し息吹きたくまし庭木かな	佐々木史女	風尖る霞ヶ関の春浅し	鈴木藻好
浅春や隣地にピルの立つ話	笹本啓子	白塗りの生きた銅像春浅し	鈴木玲子
木道の風のめぐりや春浅し	篠崎紀子	遠筑波浅春の野をペダル踏み	関谷多美子
春浅き畝の草片崩れけり	篠原さよ子	大屋根の反射が眩し春浅し	瀬戸雄二郎
暮れ泥む里は蒼茫春浅し	渋谷きいち	春浅き水に真鯉の動かざる	染谷風子
春浅し孫をお供に京の町	嶋田洋子	春浅き牧場を駆くる競走馬	反町 修
それでもね確かな気配浅き春	清水桂子	春浅し名もなき草を摘む幼児	高島寛治
句会へと喉にのど飴春浅し	下川光子	三面鏡にずらりとインコ春浅し	高橋満耶子
春浅し眼をひたと閉づ磨崖仏	霜多光代	春浅し日向に椅子を読書の吾	武田重子
自分史の引きずる昭和春浅し	菅原卓郎	勝鬨橋二度と揚がらぬ春浅し	田中章嘉
手術日の間近な友や春浅し	菅原真理	通知待つ身の置きどころ春浅し	寺内洋子

山紫集作品評

網野月を

春浅し向かう三軒空家なり 飯田忠男

客観的事実であると思われる。只その客観的な事実を上五の季語「春浅し」というシチュエーションの中に封じ込めている。加えて座五の「空家」である事実の確認の根拠がどこにあるのか、読者には全く分からないのである。それでも詩的な感興は、そうした客観的事実や事実の確認に拠るものではないのである。少なくとも作者は「向かう三軒」に興味を惹かれている。「空家なり」と断じている。それだけで作者の心の寂寥感を言い当てていないだろうか。筆者も又、「向かう三軒」に興味を惹かれる。

地震見舞ふ妻に訛や浅き春 近藤徹平

多分、携帯電話か何かでご親戚か友人に地震見舞いをしたのだろう。そう筆者は想定してみた。句の肝は中七の「妻に訛や」にある。いつもは標準語で会話している「妻」が、くこの言葉に戻っているのである。ふとした気づきの中に、驚きと発見、懐かしさと少しばかりの疎外感をも感じ取ってい

る作者がいる。幾つもの感慨が複層的に織り交じった感傷が感じ取れる一句である。

春浅し山巒つんと自己主張 飛永 鼓

大鳥羽の山々は春先になると特に「山笑ふ」という景を演出する。その少し前「春浅し」の頃には「つん」となるのであろう。まだ冬木に覆われている山々には「山巒」が見え透いているのである。座五の「自己主張」のチャレンジが句を生き生きとさせている。山を主語として「自己主張」を感じ取っている作者は山と会話しているようである。

指先が探る浅春電子辞書 松井由紀子

「電子辞書」のキーボードに触れる「指先」の感覚に「浅春」の感触を得たのである。「電子辞書」に「浅春」を打ち出して検索していると解したならばそれは無粋であらう。やはり「指先」と「電子辞書」の間に「浅春」が存在していると解した方が俳句的である。

春浅し光に晒す腕時計 綿引まりこ

春先になって袖口が開放的になったというように解釈したのでは味が無いだろう。腕を突き出して「腕時計」を見る時の動作を「光に晒す」というように誇張した表現をしていると解した方が詩的である。だからこそ「春浅し」が活きて来

るのである。春は光の季節なのであるから。

保護猫のじやれつく指や春浅し 南條きわゑ

飼い主探しをしている「保護猫」を想定した。関心を寄せてくれている人物の指に「じやれつ」と指の主の時ならず心を買おうとしているのか、「保護猫」と指の主の時ならずシンパシーが生じたのかも知れない。季語「春浅し」が効いている。仔猫の愛らしさが想像される。

廃屋の石に昔を春浅し 上戸千津子

「廃屋」の礎石なのか、玄関口の敷石なのか分からないが、石の部分がむき出しになっているのである。客観的にはその石が何の部分かは判明しないのであろうが、作者は知っているのである。何故ならば何度もその家に訪れたことがあるからである。隣家なのか、実家であったのか、家との関係性は判然としないのだが、兎に角、作者はその家と深い関係性を有している。単なる石の形状に今となつては、その石の形状だけが廃屋を偲ぶ縁になつている。「春浅し」という自然界の動植物の繁茂しない、横溢しない時期だからこそその感慨である。「石に昔を」がよく出てきた措辞である。

煌煌と消えぬ外灯春浅し 樋口元美

もしかしたら時間帯は読者によって異なる時間を想定する

かも知れないが、筆者は春の早朝を想像した。初春には自然界の朝が遅いものである。白んで来る頃合いには人々は活動を始めているものだが、「外灯」は未だに点いたままなのである。その「煌煌と」した有り様に作者はちよつとした違和感を感じているし、人の営みの強固さをも感じているのである。

春浅し憂ひほのかに増女 大場順子

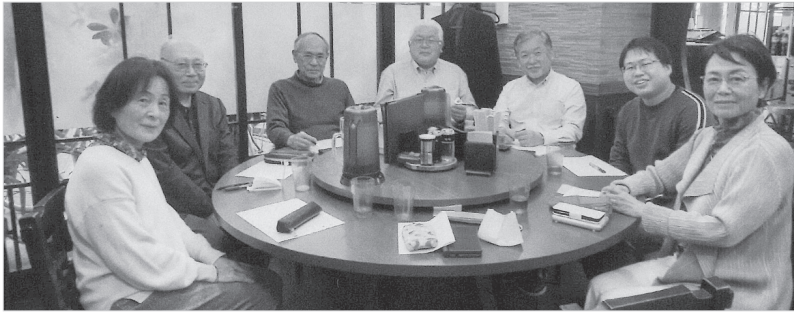
気品の高い役どころを演ずるための能の面「増女」の「憂ひ」に着目している。筆者は季節ものの「増女」を使う演目は知らないのだが、「増女」は天女や精霊と言った神々しい役どころの面であるが、その面に「憂ひ」を見出しているのである。「ほのかに」を演出できている能役者の技量が秀でているのである。

春浅し素直になれず頬ゆがみ 川島夕峰

座五の「頬ゆがみ」が具象と言えば具象なのであるが、人それぞれに異なる現象であるし、また異なる「ゆがみ」を思い描くことでもあろう。従つて、句全体が観念的な語彙によつて構築されているという印象であることは否めない。ただ、他の季節感、初夏、初秋、初冬にはあり得ないものである。「春浅し」に季語を求めて大成功である。

円卓の吟行会（上野公園）

青木鶴城



現代俳句協会の定時総会と開催が重なった三月一六日、総会への出席を兼ね上野公園に於いて吟行会を実施しました。

上野駅の公園口改札前で集合した午前十時、気温は十五℃を超え、空は抜けるような青空、風もなく絶好の吟行日和にどんな句が詠めるか期待を抱きながら各々の好きな場所を散策して十一時過ぎに西郷隆盛像の前での再集合。

当日は梅澤輝翠氏と元田亮一氏のお二人が残念ながら事情で参加が叶わず、八名の吟行句会となりました。

参道を的屋居並ぶ花巡り 京子
 西郷像の後ろ姿を桜まじり 〃
 柳の芽ときめき誘ふ風みどり 静香
 春日傘スワンボートを見守りて 〃
 春の日や西郷像とまちはうけ 拓真
 ポリプの手術を祈る春の絵馬 〃
 木の芽風行き交ふ人の声眩し 翔太
 外人の社殿に二拍花辛夷 〃

花のこゑ聞く賊将の薩摩犬 月を
 ゆきつばき風の笑はば空あをむ 〃
 「蓮池」の杭に黒白帰る鴨 修
 麗かな池畔に拍手さるまはし 〃
 隣席は上野小町や春テラス 道
 花を待つ人それぞれの上野山 〃
 相輪の蒼天突くや上野春 鶴城
 父の命乞ひたる絵馬や花まだき 〃

雅亭御徒町本店の中華料理の円卓での句会は大いに盛り上がり、各々の視点での思いの句を批評し合い、句会と昼食をしっかりと堪能しました。

句会の終了後、一般社団法人となり第一回目を迎える現代俳句協会の総会会場である東天紅へと向かい、総会と懇親会へ参加しました。

総会において、網野月を氏が常務理事兼G HOCセンター長、日高道を氏と保坂翔太氏が評議員、青木鶴城が監事に承認されたことをご報告いたします。

春の吟行会の記

梅澤佐江

春の吟行会は、三月三十日の土曜日に浦和別所沼会館一階大会議室にて開催された。昨日の荒天一過快晴の空の下、別所沼公園内を吟行して、十二時半締切で囁目二句を投句、五十四名の出席で百八句(主宰の句を含む)となり一時半に開会する。

司会・開会挨拶 小林京子
主宰挨拶 山本鬼之介

本日は奇跡的に良い天気になりました。桜も合わせたように開花して、大勢の方のご参加を頂き嬉しく思います。

今回の吟行会の担当である第一例会、第五例会をはじめ、事業部や他の方々のご協力により開催出来ました。有難うございます。

選句 主宰は多選

披講 雪欄作家十句、一般参加者五句
一般選 梅澤佐江
雪欄選 茂木和子

主宰選 山本鬼之介

主宰詠

五分か三分か議論の余地のある桜
慎ましく句碑を浮かせり芝桜

主宰選

三極(天・地・人)

因 小流れは序の舞の如初桜
風 佐江
裸婦像の全身春の風の中
子
胴吹きさの桜わらべのやうに笑む
桂 子

超特選

木の芽風詩人の小屋の窓が開く
延 昭
葛藤をほぐすかに春の噴水
喜 恵
地酒酌むつむりの上の花三分
卓 郎
さくらさくら青空いよよ本気なり
節 代
春の噴水二つとなれば宴かな
かつ子
沼うらら総身に軽き一気圧
昇
初花や独り言いふおばあさん
月 を

特選

蓮の芽を育むごとく軋む橋
徹 雄
花待ちの蒼天映すにはたづみ
鶴 城
詩ごころ花に遅速のありてこそ
宣 子
かな女句碑五文字の掠れ春愁ふ
昇
春天へ曙杉は祈るかに
まりこ

日映りに沼畔の鳩青き踏む
春の吟行弁天鳥に浦和の「う」
裸婦像の肩に戯る恋雀

律子

春日差しメタセコイアの骨体美

道子

花の笑み未だ二分なりそれもまた

茂木

春陽射しあびて虹色鳩の首

亜弥子

守人に労の褒美や初桜

マスマミ

主なき窓辺に咲けり風信子

美紗子

雲梯に群がる子らへ木の芽風

久夫

蒼天や上着投げ捨て観る桜

上野和子

別所沼で鯨を釣るや四月馬鹿

六弦

さらめきの日に溶けてゆく雪柳

翔太

噴水の波紋華やぎ沼の春

亜弥子

うららかやベンチにあぐら異邦人

拓真

詩人の家の雨戸繰る音桜二分

夏野

うららかや日溜りに鳩座り込む

慶子

「風の神はるるばる桜の別所沼
走り根の窪みに抱かれすみれ草
老桜の五分咲きといふ気品かな
胡蝶重の囲む庵や「風信子」
待ちわぶる桜啄む罪な鳥
満面の春陽そそぐや沼樹林
釣り人の丸き背に影蝶の昼
春うらら「かな女」の句碑と対面す

マスマミ
美智枝
美紗子
公子
稀香
千祐
真理
久美子
知子
進

蝶生る額縁工場鍋を干す
春昼や弁財天に神頼み
かな女の碑春の光の中に建つ
桜待つ我が子の誕生待つやうに
人の世のはかなき憂ひ薄桜
春光の水面むさばる鯉の口
めをと日和愛犬ひより小米花
春暑し沼の端に鳩十一羽
魚飛ぶや沼の端つこ春うらら
水の粒光れり春の日となれり
浮き揺らすメタセコイアの沼へ春
うらうらに春日のベンチ鳩ポツポ
葉ばかりの河津桜や吟行会
晴れ晴れと老樹よりそふ初桜
曙杉根元に光る鼓草
爪立ちてアツプを狙ふ初ざくら
ご同慶よくぞ咲き出づ老桜
沼の風纏ひ古木の桜満つ
麗らかなや沼を見下ろすカフエテラス
レジャーシートの余所に河津桜の花は葉に
公園の老樹の桜添木得て
さくらさくら見知らぬ人に会釈され
亀鳴くを耳をこらして別所沼
風の神じつと佇む沼うらら
春泥の洗礼受けし児等の蹠
沼の鳥春を背負ひて波紋織る

山菜
桂子
風子
夕峰
チアキ
君夫
月を
久夫
ひさの
上野和子
六弦

道造の掘建小屋に花の客
桜どき句友を誘ひかな女句碑
メタセコイアの天網ゆるる芽吹きかな
新人に先輩四人春の釣り
古木から胴吹きの花二輪吹く
林立するメタセコイアの芽吹く声
駄駄つ児の傍にすみれや観音堂
芝桜あつまり句碑を称へけり
花零す鳥の会話のきらつきらつ
芝桜かな女の句碑を彩れり

節代
道を
かつ子
灯留
美子
治子
はるみ
和葉
和子
佐江

普通選

一般選、雪欄選、主宰選終了後、主宰の選評を頂き、三極の天地人には色紙、超特選には短冊が授与され、高得点者には水明より記念品が贈られた。

高得点者

一位 五明 昇 二位 本橋 稀香
三位 西幅 公子 四位 境 延昭
五位 横山 君夫 六位 大村 節代
七位 青木 鶴城 八位 菅原 卓郎
閉会の挨拶は運営幹事長の網野月を氏により行われ、本会は午後四時三十分は無事終了した。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子

徒に過ぎゆく昼の桜餅
隈取りの仕上がる薬屋桜餅
桜餅本郷菊坂鑑坂
丹の椀に手鞠麩浮かせ雛の日
風呂敷の似合ふ女や桜餅
小糠雨降る尼寺や桜餅
春コート伊丹の空の別れかな

拓真
喜恵
マスミ
順子
治子
京子

弁天の幟はためき桜餅
つぶ餡もいねと妻言ふ桜餅
腰のばし桜餅買ふ日和かな
丹の橋を黄の長靴や春の雨
丹精の学級花壇卒業す
ゆるやかな流れに歩幅桜餅

以上特選
徹平
卓郎
由紀子
拓真
喜恵
和葉

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城

丹羽文学に没頭せるや春の夜
春光や丹の色美しき柿右衛門
青丹よし奈良の都の桜餅
丹後路や伊根の舟屋の春時雨
さくら餅東をとこと京をんな
古稀の友との再会祝し桜餅
花の香のもと丹念に科学部員
一筋の木洩れ日やさし桜餅
古雛の丹色あやしき袴かな
桜餅赤子の肌の香しき

チアキ
順子
節代
マスミ
延昭
稀香
舍人
順子
治子
和子

鉄柵に指で名を書く蠶ぐもり
急ありや一直線に蜂の飛ぶ
表札は我が名と同じうららけし
燃えつきし歩く蜜蜂土に帰す

いちい
竺仙
士史

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄

大地より吹き来し荒るる黄砂かな
蠶るや置かれしままの父の杖
羅天や日輪は輪を奪はれり
冒険の予感ほらむや黄砂吹く
風にゆれおいでおいでの花の蜂
二胡で聴く馬の嘶き黄砂降る
小雨なり蠶る玻璃の斑かな

以上特選
りこ
竺仙
峰雄
いちい
士史
みどり
鶴城

立ち詰めの官女ねざらひ雛納
手の届く場所に歳時記春炬燵
水脈を切る棹の滴に水温む
白梅の白極めたる山の陰
生国を信濃と発し春炬燵
余寒なほ靴音固き跨線橋

理恵
順子
星歩
徹雄
昇



春炬燵しまふしまふと月を越え

それぞれの道それぞれに青き踏む

春灯を要返しに舞扇

春炬燵予後よき妻の薄化粧

うぐひすや根岸の里は訛なし

春炬燵茶を濃く淹れて一人の日

春炬燵邪魔と云はるる定年後

捜してた靴下片つば春炬燵

春疾風娘にありし反抗期

道成寺に絵解き説法聞く日永

——以上特選

千 祐

理 恵

順 子

萬 蝶

星 歩

康 世

雅 夫

喜 久

徹 雄

第四例会 (浦和)

石井喜恵 反町 修 報

海苔粗朶を隈なく染むる夕日かな

鯉こくに余寒を解く峡の宿

警策の静寂に響く余寒かな

累代の老舗の海苔の黒光り

沈黙のアンモナイトにある余寒

洪鐘の余韻余寒の中に散る

呪ひのごと朝餉の海苔を一焙り

——以上特選

海苔焙る「はいろに限る」と祖母の声

装ひたき十二単や余寒なほ

余寒なほずんぐりむつくり農耕馬

ビル陰に放置自転車ある余寒

曆 文

昇 昇

修 修

由 紀子

寛 治

玲 子

延 昭

——以上特選

行 雄

翔 太

恵 子

由 紀子

第五例会 (浦和)

梅澤佐江 河野はるみ 報

晩年の心ゆさぶる春の雷

安曇野を潤し過る春の雷

春雷や水草揺れて泡ひとつ

光り合ふ春三月の波がしら

突として鳴る春雷のそれつきり

春雷や愛の名残のごと幽か

三月の駅悲喜こもごもの左様なら

——以上特選

天井の裸婦めくしみや春の雷

真剣な話邪魔する春の雷

三月や自づと目覚む旅心

春雷や彩が飛び出すマティスの絵

春雷を口実にして縄暖簾

秋ヶ瀬の川面煌めき三月来

玲 子

知 子

水 尾

義 子

佐 江

——以上特選

水 尾

義 子

玲 子

宣 子

はるみ

知 子

でん治

マスミ

寛 治

光 子

玲 子

昇 昇

延 昭

修 修

喜 恵

三月や袴の乙女駅に咲く

山路来て春雷に会ふ薄けむり

有馬より道行となる春の雷

——以上特選

蕉翁と関越ゆる夢春炬燵

足入れてスイッチ入れぬ春炬燵

真四角に想ひ出隠す春炬燵

翻車魚の恋は泡沫西行忌

春愁を分かち合ふかな人魚像

手招きの先にひっそり春炬燵

春炬燵不老の夢を貪りぬ

——以上特選

憤つて潜り込む児や春炬燵

春炬燵祖父より享けし生さる知恵

諸恋の夢のあとさき春炬燵

小魚をさつとあぶつて海苔茶漬

坂道へ魚鼓の音散らす春の風

春炬燵結婚するかしないのか

晩学や寝るも醒むるも春炬燵

居酒屋の自慢の魚拓春の昼

耳朶に鳴る「悪魔のトリル」春炬燵

永き日や魚蝦突く海女の深き笛

まろび寝にほどよき温み春炬燵

春こたつ背負ふ顔先を猫通る

千 祐

美佐尾

佐 江

——以上特選

石田慶子

正木萬蝶

マスミ

はるみ

千 祐

佐 江

京 子

慶 子

萬 蝶

——以上特選

月 を

鶴 城

佐 江

慶 子

はるみ

京 子

ひろこ

千 春

星 歩

マスミ

稀 香

千 祐

淡雪や曇り硝子と白底翳

萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

鳥雲に刻々変はる潮の色

玲子

春風や何か聞こゆる古城跡

千津子

いつの間に座敷童が雛の客

ゆら女

目鼻なき紙の雛の笑まひかな

洋子

鬻いまだ結へぬ力士に子猫蹠く

和子

女系家族鉢いつばいの花重

道子

架け橋も神話の島も春霞

早苗

——以上特選

花重さのふの野良が鈴付けて

ゆら女

荒れ庭にも季移り来し初重

洋子

朝光に揺るる山辺の壺すみれ

玲子

風に震へ肩寄せ合ふやすみれ草

千津子

発掘の現地講座へ初燕

和子

葦咲く小町の井戸のかたはらに

道子

村はづれの朽ちし祠へ敷椿

千枝子

夫婦して予後の散歩や花重

千世子

度々の打上げ延期雁帰る

満耶子

亀鳴いて主長寿となりにけり

さわゑ

手塩にかけし董出窓を演出す

嶋田洋子

楚々と生きよと道の辺のすみれ草

早苗

昔話あれこれ 37

『大鏡』大臣列伝 時平

雷神道真を睨みつけた時平

道真公が雷神となり、清涼殿に落雷しようとした時、太刀を抜いて

「生存中は、貴方は私の次の位であつたではないか。神になられたとしてもここでは、私に遠慮なされよ」と睨みつけると、雷も一時は止んだ。が、それは時平への遠慮ではなく、天皇の威光への敬意であつて、時平の威力への屈伏ではない。

時平の子孫は短命で、時平の権力を継承できなかった。

大臣列伝 忠平

大臣列伝 仲平

二男の仲平は、弟忠平より昇進が遅く、大臣任命は忠平より三十年（史実は二十年）も遅れた。その時太政大臣であつた忠平は次のようなお祝いの歌を贈つた。

遅く疾く遂に咲きぬる梅の花
誰が植ゑ置きし種にかあるらむ

（大意）梅の咲くのに遅い早いはあるが、ついにはいずれも咲くように、我々兄弟も、前後はあつても共に大臣として咲きそろうことが出来ました。この種を植えておかれたのは亡き父基経公なのですね。

この歌の通り梅の花を冠にさして対面した。これで年来の蟬りも解けた。仲平公は心の端正な方であつた。最後は左大臣に昇進したが、後を継ぐべき子もなく、政権は弟の忠平に移つて行く。

この大臣は基経公の四男である。
延長八年（930）九月に摂政（朱雀天皇八歳）天慶四年（941）関白（朱雀天皇十九歳）を拜命した。

公卿として四十二年、大臣として三十二年（史実は三十六年）政治を執つたのは二十年であつた。後に「貞信公」と言われ、「小一条の太政大臣」と言われた。朱雀院、村上天皇の伯父である。

（つづく）丸山マスキ

各地
句会



ミモザの会 (横浜)

春の旅おつめ下さい中程に
 国中の災禍を流せ雪解水
 春の雨駆け出してゆく長い髪
 卒業の挨拶角の交番へ
 中空に春虹描くは天使かな
 春愁や心中物の芝居あと
 道草を誘ふかをりを沈丁花
 テレビには戦車卓にはさくら草
 柿の木塾 (浦和)

由美子
 萬蝶
 亜弥子
 史代
 慶子
 栄子
 千春
 章嘉
 かつ子
 水尾
 和葉
 節代

さらさらと馬と少年牧開く
 春雨や誘ひ上手に乗りもして
 りそな俳句会 (浦和)
 寝転べば睡魔見舞ふや春の海
 足跡は幼児と子犬春の浜
 貝耳に当れば春の海の声
 都会派の烏古巣は万屋よ
 音に聞く鳴門の渦や春の海
 きらさららに心わくわく春の海
 大仏を眠りに誘ふ春の海
 春の海いよいよ白き波がしら
 野菊の会 (与野)
 人慕ふ気怠さここに春の間
 大袋小袋ギヤルの桜時
 ひつそりと命蠢く蝌蚪の紐
 白子舟上げてドジャースユニフォーム
 雛の会 (浦和)
 蛇穴を出づ全長さらす方円墳
 蛇穴を出て棒持つらと出合ひけり
 信濃路や風に膨らむ春シヨール
 遠ざかる車見詰むる春シヨール
 ふるさとへ目立ち過ぎて春シヨール
 春ともし唐三彩の馬の艶

恵子
 和子
 曆文
 寛治
 久美子
 建治郎
 道を
 勲
 マシミ
 雅夫
 美代子
 和子
 清子
 光子
 喜恵
 燈女
 公子
 チアキ
 輝翠
 佐江

芽吹句会 (浦和)
 下萌や足裏に響く地の鼓動
 踊り子の足の華やぎ春舞台
 のどけしや過不足のなき昨日今日
 満身に草の息吹を野に遊ぶ
 野遊やシャトル打ち合ふ君と僕
 陽炎もときに足枷乳母車
 足占にて恋のことなど臆めく
 櫻蔭句会 (浦和)
 風光る太極拳の剣の舞ひ
 花の雲独歩の句碑の桜橋
 二分咲きの花に冷き雨止まず
 文豪の住みし町並風光る
 川土手に垂れて満つる花の雲
 訪ひゆかな去年も訪ひたる花の里
 菩薩立つ古刹への道花盛り
 天蓋の桜並木は黄泉の国
 花の雨淀水路沿ひ並木道
 風光る万華鏡めくビルの街
 崖下の駅にやうやう花のとき
 山茶花 (浦和)
 秋吉台野焼きて次の新芽待つ
 龍となり火の鳥となり野火駆くる

千重子
 久美子
 富子
 玲子
 修
 ひろこ
 道を
 多美子
 茂子
 行雄
 千恵
 公子
 由紀子
 美智枝
 久美子
 美子
 真理
 幸代
 美江子
 マシミ

りんどう俳句会 (浦和)

泣く程の訳は無きまま卒業す
陽炎に杭打つてゐる測量士
卒業歌大志はぐくむ富士の幸
着物姿の母に照れるや卒業子
明日よりは企業戦士ぞ卒業歌
春風や作務衣干したる庫裡の脇
陽炎の牧にベガサス現るる
欄干を火の玉駆くるお水取
三つ編みを空へはなちて卒業す
詰襟のびたりときまる卒業生
雑魚を干す浜の媼の日永かな

寛治 君夫 弘夫 治子 風雄 翔太 順子 まりこ 夕峰 卓郎 伸子 小麦 圭子 風子 夕峰 まりこ さよ子 風舎 寿夫 律子 和子

明日からは別別の道春の泥
柏手の母子の破顔春の泥

徒然なる歩を止まらしむ土筆かな
青葉の会 (浦和)

陽炎や曾祖父の墓探す昼
強東風に足場組みゆく男達
朝東風や絡み合ひたる舳ひ船
見あげたるみんなの顔にさくら東風
朝東風や揺るる小舟に光る潮
強東風や主なき庭を荒しゆく
海見ゆる丘に群生黄水仙
夕東風や浜大漁の大宴
荒東風や潮の匂ひの海通り
和歌山水明句会 (和歌山)

月を 鶴城 京子 和子 洋子 啓子 公子 美子 美紗子 美智枝 輝翠 真理 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 美紀子 麻美 廼代

あゆみの会 (浦和)
坊泊り独活の酔味噌と般若湯
花筵一升瓶をどんと置く
飯蛸の俳句作り四苦八苦
朝市の飯蛸を追ふ二三匹
酔ひ醒めのコップ一杯春の水
晩酌やからし葉は湯に通すだけ
きざきサークル (浦和)
「ところどころ」陽炎纏ふ人攫ひ
陽炎に奪はれさうな猫車
春灯や杖を納むる結願寺
春灯や手すきの和紙の薄明り
陽炎の中に少年逆上がり
春灯や馴染のバーのジントニツク
春灯バンドネオンの余韻なほ

俱子 山遊 啓子 重子 藻好 昇 俱子 啓子 健司 和枝 和子 富子 文子 治子 あつ子 朋子 裕誌 千重子

鶴川山百合句会 (町田)

色街へ急ぐ僧侶の臚かな
怒つた像がごめんな厚に春臚
触れさうで触れぬ手と手の臚かな
臚夜のカセットで聞く青江三奈
濁り目は憂さを見ぬため臚かな
コロツケの湯気もち帰る家臚
かんばせの佳き古雛を飾りけり
モンローウオークの前ゆく鴉春浅し
飲む夫に誘つてごめん臚月
臚かないつとも上座に父の影

雄二郎
月を
史代
広子
千春
万蝶
理恵
美千子
うさぎ
玲子

宝引きや観音堂に婆燃える
福引の運にも見離されにけり
余寒なほひとつ残りし角砂糖
薄氷と私の心を踏みくらへ

寛久
白鷺
ことは
友夏

駅ピアノ詰襟で弾く卒業生
卒業日白衣の染みもなつかしく
生きる術また一つ増え卒業す

茂子
秀子
みき子

芙蓉句会 (浦和)

呼鈴を押し待つ間の黄水仙
俯いて思案顔なる黄水仙
被災地の畦に一輪黄水仙
若狭水明会 (若狭)
鶯餅フィアンセ連れて息子来る
薄氷や少し弛みし松の縄
薄氷や田んぼに散れる羽毛多々
薄氷や溶けて二人の蟻り
切り花を捉らふ薄氷古バケツ
ごんこんと薄氷つつく老いの杖
女子会に鶯餅や通る声

税子
仁
美子

うたかたの日々の行方や石鹼玉
垣を越えゆつくり空へしやばん玉
鳥達に携ふ梢や山笑ふ
ラーメンをシェアする女子や山笑ふ
気球より眺むる遺跡養花天
車窓より白馬連山山笑ふ
石鹼玉貴方を入れて光りけり
DLのキャストの放つシャボン玉
気晴らしの包丁研ぎや桜鯛
嬰兒の瞳に映る石鹼玉

夏野
ひさの
元美
風舎
礼子
しるく
さち子
月を
鶴城
宣子

能登の山よ円を描いて鳥雲に
身じろがぬ地蔵の笠や涅槃雪
流鏑馬の的射ぬきたる華の武者
漆黒の円空仏や雪柳
絵てがみは野仏ひとつ涅槃雪
春疾風円陣を組む草野球
朝市立たぬ輪島の空を鳥帰る
流鏑馬の的射る男花の下
能登線のレールは拉げ涅槃雪

山菜
更穂
光代
珪子
紀子
静香
曆文
美佐尾
さいち

借景の芽吹きいちどきぼはんぼん
まなざしはもう母のもの孕み鹿
降りしきる淀にピーズや春灯
孕み鹿老いの起ち居に似て愛し
野ばらの会 (浦和)
卒業や子の成長の眩しくて
担任をあだ名で呼びて卒業す

人美
洋子
智恵子
ゆら女
栄子
夏江

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
春の風邪夢が現に紛れ込む
コイン一枚こりと筒に水菜買ふ
三月や挽ぎ取られたる金釘
牡丹の芽古利にのこる蓑紋
木曾節を流す日永の蕎麦処

延昭
健司
俱子
美枝子
昇

水明熊谷句会 (熊谷)

菜の花やSL高く夕汽笛

晩霜に濡るる前垂れ野辺地蔵

「虎造」の古き音源忘れ霜

ゴッホにも負けぬ菜の花畑かな

菜の花や北前船の往きし海

菜の花や夕日の中を車椅子

菜の花や香に望郷の深まりぬ

菜の花畑おんぶ解かれて子の一步

たかなな俳句会 (川口)

春の道抱かれた犬の丸々と

背を丸め眉ととのふる日永かな

春昼や「乙女の祈り」弾く老女

丸髻の祖母の遺影や春灯

うたかたの夢に溺るる春の昼

ふるさとの野の色届く鶯餅

春昼の頬杖に風力フエテラス

俳句の手ほどき (岩槻)

信条をいのちの限り種浸す

訪ふや雪の別れの銀閣寺

薄氷に寄する小波限りなく

落ちさうに軒にせり出す雪の果

雪の果入江の奥に津波の碑

徹平 義子 水尾 佐江 延昭 静香 水尾 鶴城 義子 小麦 謙一のり子

涅槃雪よもやと思ふ今朝の庭
石垣に雪の名残や舟下り
明日を待つ家並に雪の別れかな
門限のなくて二次会花の宴
限りある花の命や梅の花
春の海少年の夢限りなき
貸舟の解かれぬ舳ひ忘れ雪
雪の果朝日に跳ぬる小枝かな
音もなく嬾歌の山の名残雪
小梅の会 (浦和)
如月や生まるるものと散るものと
梅盛り大道芸人の出番
闇深く春雷止まず静寂裂く
春や川面光りてゆるりと流る
水ぬるみ釣糸少し揺れにけり
円卓の会 (浦和)
参道を的屋居並ぶ花巡り
柳の芽ときめき誘ふ風みどり
春の日や西郷像とまほぼうけ
木の芽風行き交ふ人の声眩し
花のこゑ聞く賊将の薩摩犬
花を待つ人それぞれの上野山
麗かな池畔に拍手さるまはし
父の命乞ひたる絵馬や花まだき

忠男 美子 幸代 桂子 久美子 翔太 卓郎 千アキ かつ子 進 隆文 隆然 恵子 道子 京子 静香 拓真 翔太 月を 道を 鶴城

若楠句会 (浦和)
猫の恋ラーメンする夜勤明け
丘に立ち国見をするや花ぐもり
体育館の屋根はかまほこ花曇
風を切るマラソン人や涅槃西風
屏風背の記者会見や春来る
花曇点灯早き上野山
球春ぞ応援団長風を呼ぶ
若鮎句会 (浦和)
肩書はもう捨てました落し角
海中に竜宮ありや春の海
光悦忌赤染茶碗の非対称
たをやかに光波打つ春の海
銀輪で街道疾る春の海
落し角老いて心の角丸く
きらめきは隧道の奥春の海
まさなる空をとりこむ春の海
琴堤琴響く宮殿春の海
今さらに何を願はん落し角
春の海心の五円を投げ折る
雲湧きて雲の鎮まる春の沖
新品の学生はんや落し角
峠茶屋日裏の先の春の海

直子 風舎 京子 真由美 葉子 鶴城 宏治 稀香 秀子 芳春 ひとみ 順子 貴真 香音子 道郎 紀子 拓真 月を 鶴城 喜夫

新樹の会 (浦和)

春場所や「けつぱれ」を背に電車道
句をひねる生みの苦しき春疾風
春場所や力士飛び込む溜席
春場所の賞を独占快男児
春場所や大阪城に触れ太鼓
春場所や鬢付けの香の御堂筋
産土へ御神酒ぶら下げ花見かな

めだか句会 (浦和)

赤本を捨てざる朝よ風光る
名人の神の一手ぞ斑雪
来たる日も春本番の風かな
無住寺に続く足跡斑雪
斑雪馬あらはるる白馬山
本当はとも好きです糸繰草
桜まじ上手く行かない本歌取
強風に笑顔で向かふたんぽぽよ
蒲公英や心andraげ手術待つ

若枝句会 (浦和)

春の海ゆるる電車にまどろみて
つばくらめ汝の故郷は安けしや
甲板で帽子押さふる春の海
つくし野や鄙の車窓に広がれり

徹雄 平通 清吉 風子 道子 鶴城
灯留 六弦 久夫 知子 妙子 月子 鶴城
はるみ 三茅 美佐子 敏江 みどり 泰生

駅舎内巡回するや初つばめ
春の海遠き記憶の道しるべ

珊瑚の会 (浦和)

大仏のしづかに座る鳥雲に
故郷に繋がる鉄路鳥雲に
薬や背中にあるランドセル
眼を病んでより薬の声聞こゆ


貞代 泰子 水尾 昇 恵子 史代

昭和俳句史

前衛俳句／昭和の終焉

川名大

俳句史研究の第一人者が膨大な文献資料から分析・考察した、名句の表現法に現れた新風の流れを克明に記した一冊。きら星のごとく登場した俳人たちと、その作品を通して俳句表現の変遷を読み解く好著。昭和俳句史の決定版！



昭和俳句史
前衛俳句 昭和の終焉

川名大

定価 3,520円(10%税込)
四六判／並製／504頁
ISBN978-4-04-884543-4

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口(0570-002-008(ナビダイヤル)へ)

ひこばえや今も故郷に木の駅舎
再会を約す握手や鳥雲に
薬や「子をとるところ」てふ遊び
風音の奥の水音ひこばゆる
薬や根付きさうなる木のベンチ
雲梯をおよぎ渡る子鳥雲に
ジャングルジムに暁白小僧鳥雲に


広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 節代

学校俳句歳時記

先生と子どもたちが詠んだ

先生と子どもたちが詠んだ、学校で生まれた俳句歳時記の決定版

全国の小中学生、高校生、先生を対象とした「りんり俳句大賞」に10年間で寄せられた24万4463句から、優秀句を例句にした子どもたちのための学校俳句歳時記。



学校俳句
歳時記

星野高士、仁平勝、石田郷子
監修 上廣倫理財団

編者 星野高士、仁平勝、石田郷子

定価 2,750円(10%税込)
四六判／並製／328頁
ISBN978-4-04-884549-6

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口(0570-002-008(ナビダイヤル)へ)

令和6年 水明全国大会・懇親会のご案内

令和6年水明全国大会をご案内申し上げます。誌友・同人・季音同人の皆様には、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

■令和6年水明全国大会

日時 令和6年6月29日（土曜日）
受付開始 11時30分 開会12時 閉会17時00分
会場 さいたま共済会館 6階 601号室
〒336-0064 さいたま市浦和区岸町7-5-14
TEL 048-822-3330
行事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表賞、季音同人、新同人の紹介、兼題入選句の発表と表彰、講評等。

■水明懇親会（第94周年）

日時 令和6年6月29日（土曜日）
受付開始 17時00分 開会17時30分 閉会20時30分
会場 さいたま共済会館 6階 601号室
行事 受賞者のご挨拶、アトラクションなど

■参加費 令和6年全国大会・懇親会 15,000円
令和6年全国大会のみ 3,000円
懇親会のみ 12,000円

■申込締切 令和6年6月15日（土曜日）
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。
※なお、参加費を振込にて別途送金される方は、指定「申込書」の「申込金支払方法」の振込をチェックしてください。
※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。
◎全国大会は貴重な機会です。永年の会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

令和6年水明全国大会実行委員会 実行委員長

風 声

○現代俳句三月号——「現代俳句の風」欄

春耕を父に習へば土の声

左巻き右巻きささぐる藤の蔓

犬吠の風に陽の香や花菜照る

バラソルやスピッツ乗するベビーカー

水温む男所帯の洗ひ桶

調律の途中を端折り初音かな

春駒の呼び込む光峽の村

辛夷咲くや光とらへて伎芸天

井上燈女

岡田宣子

小駒さち子

近藤徹平

永野史代

野田静香

宮崎チアキ

田寺玲子

○現代俳句三月号——『現代俳句年鑑2024』を読む」欄

石黒英進氏の感銘十句抄に

代代の矜持を継ぎて青蜜柑

西野洋司氏の感銘十句抄に

一列の電信柱おぼる月

青木鶴城

池田雅夫

○天塚（宮谷昌代主宰）三月号——「十誌の珠玉」欄

序の舞の摺り足潜む冬座敷

○くぢら（中尾公彦主宰）三月号——「受贈俳誌美術館」欄

持ち歌は未だ「王将」新年会

○幻（西谷剛周主宰）三月号——「受贈誌拝見」欄

序の舞の摺り足潜む冬座敷

○玉梓（名村早智子主宰）三・四月号——「他誌拝見」欄

その景色秘めたる雪見障子かな

鬼之介

鬼之介

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）三月号——「諸家近詠」欄

道端の地藏に謂れ木の葉散る

○笹（山本一步主宰）三月号——「受贈誌の一句」欄

冬瓜を抱へシンクにどずんと置く

（日高道を抄出）

鬼之介

岡田宣子

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

〔指導者〕 網野月を

〔作品〕 5 句 〔受講料〕 1,000円

〔方法〕 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記

③84円切手同封 ④返信用封筒は不要

⑤締切なしで随時受付

〔送付先〕 網野 月を 電話080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和六年三月三十一日現在 —

山戸美子	3	西幅公子	1
山口富子	3	綿貫ひさの	1
春の吟行会より		本橋稀香	1
星野和葉	1	正木萬蝶	1
石山かつ子	2	岡田宣子	1
大村節代	2	河野はるみ	1
染谷風子	1	茂木和子	2
保坂翔太	1	綿引まりこ	1
日高道を	2	石田慶子	1
石井喜恵	1	福田千春	2
清水桂子	2	— 合計 39 口 —	
日吉亜弥子	1		
反町 修	2		
丸山マスミ	2		
曲淵徹雄	2		
田中章嘉	2		

誌代等のお支払いのお願い

今月号に誌代・同人費・季音同人費のお支払いの為に郵便振替払込書を同封いたしております。

誌代等は前納をお願いしております。

六か月、または一年分をお支払ください。

誌代のみの方は、六か月分六千円、一年分一万二千元
 同人の方は、六か月分一万二千元、一年分二万四千元
 季音同人の方は、六か月分一万五千元、一年分三万円です。

前回お支払いいただいた時の領収通知はがきに、いつまでお支払いいただいたかが記載されていますのでご参考にして下さい。

尚、誌代を大幅に前納していただいている方には、今回は払込書は同封しておりませんのでご放念ください。

また、今回季音同人、同人に昇欄される方は七月から金額が変更になりますが、それらの方には追って総務部から連絡を差し上げます。

水明俳句会 総務部長 日高 道を

俳句

6月号 予告

5月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑩

巻頭作品50句 一 矢島渚男
作品21句 一 西山睦・佐怒賀正美

「二次創作」ともいえる「読み」の秘密に迫る!

鑑賞という 創作

大 特 集

◆総論 俳句の読みとは何か…………… 永瀬十悟

◆論考 批評 鑑賞という二次創作

他分野における二次創作の潮流

◆コラム 短編小説「ほんほん彩句」の魅力

◆鑑賞指南 読み・鑑賞のアドバイス

◆名批評・鑑賞紹介

第58回

蛇笏賞発表!

●受賞のことは ●選評
●自選50抄 ほか

追悼エッセイ

檜山哲彦

しなだしん / 木暮陶句郎

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

特集 古典との対話

昭和・平成 私のシンボル

巻頭作品10句

和久田隆子・甲斐遊糸・大木あまり
坪内稔典・花谷 清・渡辺純枝
広渡敬雄・和田華凜

俳壇

6月号

5月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
井越芳子

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅳ期」…………… 島村 正・和田順子

旧派の俳句…………… 秋尾 敏

知つてるようで知らない俳句用語…………… 井上泰至

名句のしくみと条件…………… 坂口昌弘

私の本棚・私の一冊…………… 松尾隆信

十二か月添削教室…………… 前北かおる

俳書の森を歩む…………… 栗林 浩

俳句と随想12か月 石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

後記

五月号は恒例の水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞の六賞を受賞される方々の発表とお喜びの声の特集です。

各賞受賞の方々には、一年間の努力をされた結果が、賞として実ったのだと思います。特に新珠賞には、年々素晴らしい句が集まり、喜ばしい限りです。新珠賞は、応募年齢も俳句の経験も関係なく選ばれる素晴らしい賞です。今年は二十名の方が応募されましたが、来年は更に多くの方が挑戦なさいます様に。

今年も全国大会は、昨年全国大会を行ったさいたま共済会館が会場です。今月号巻末にお付けしました申込書にてお申し込み下さい。そして受賞される皆様にお祝いを申し上げます。

季音雪欄作家の茂木和子氏が、

二冊目の句集「朗朗と」を上梓されました。

鬼之介主宰の長くて丁寧な序の中に「——その日浅紫に染められた和子さんの髪が実に印象的で、心の中に平安期の御世よろしく「紫の上」という尊称を書き留めた。——」とあります。和子氏はお若い頃から、髪やお召し物を紫になさっていました。この度の句集も紫の装幀で、和子氏の化身のようです。句集「朗朗と」がお手元になく、お読みにになりたい方は、茂木和子氏にご連絡なさって下さい。残部が少しおありのようですから、お譲り頂けると幸いです。

尚、今月号の現代俳句鑑賞で網野月を氏、句集喝采に曲淵徹夫氏がこの「朗朗と」を取上げて下さっています。どうぞで、「一読下さい。五月号は賞に輝いた方が、もう一冊頂きたいと希望されます。増部ご希望の方は、お早目に事務局までお申出下さい。

(節代)

今月のはてな？

- 小半 (こなから)
- 好文木 (こうぶんぼく)
- 日天子 (にってんし)
- 足日 (たるひ)
- 増女 (ぞうおんな)
- 玉筋魚 (いかなこ)
- 翻車魚 (まんぼう)
- 白底翳 (しろそこひ)
- 拉 (ひしぐ)

97 94 93 85 83 45 45 28 14 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和六年五月号
通巻一一二四号
令和六年五月一日発行

発行所

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇一二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一一、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替

〇〇一七〇一〇一九三九三

印刷所

中央美版

発行人

山本鬼之介

令和6年水明全国大会・懇親会 参加申込書

〈申込締切 6月15日(土)〉

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 全国大会・懇親会参加 | 会費 15,000円 |
| 2. 全国大会のみ参加 | 会費 3,000円 |
| 3. 懇親会のみ参加 | 会費 12,000円 |

※上記の希望項目の数字を○で囲んでください。

~~~~~

上記参加費を添えて申し込みます。

※なお、参加費を振込で別途送金される方は、「申込金支払方法」の振込を○で囲んで下さい。

2024 年 月 日

|         |    |     |     |
|---------|----|-----|-----|
| 住 所 〒   |    |     |     |
| 氏 名     |    | 電 話 | — — |
| 申込金支払方法 | 現金 | 振込  |     |

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)  
水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

|         |     |
|---------|-----|
| 電 話 番 号 | — — |
| 氏 名     |     |

(緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時に使用し他の用途には使用致いたしません。)

















## 季音抄

山本鬼之介

初音聞くほかに音なき奥の院  
はてしなき空ある限り揚雲雀  
春雷や阿修羅は眉間ひき締むる  
春雷や空を見上ぐる袋熊  
いぬふぐり星屑咲かす野辺を行く  
鍋底で震へる螢いかの脚  
訪ふや雪の別れの銀閣寺  
菜の花や夕日の中の車椅子  
てつぺんに春の昼ある観覧車  
龍天に昇る古城にかかる雲  
沈黙のアンモナイトにある余寒  
島影の遠く近くに春の海  
浮雲へ向かひ磴ふむ実朝忌  
坂道へ魚鼓の音散らす春の風  
春昼の頬杖に風カフエテラス  
蟠りのとけて流るる春の川  
ゴッホにも負けぬ菜の花畑かな  
それぞれの道それぞれに青き踏む

石井喜恵  
石山かつ子  
大橋廸代  
大村節代  
小倉倭子  
栢尾さく子  
梅澤佐江  
井上燈女  
森川義子  
池田雅夫  
高島寛治  
内田恵子  
曲淵徹雄  
河野はるみ  
野田静香  
飛永 鼓  
原田秀子  
石川理恵

次の原稿を募ります。随時発行  
所宛、ふるってお寄せください。  
なお掲載については、編集部にお  
任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽  
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月  
を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起  
きた面白い話題、めずらしい経験  
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

鉄瓶の猛る湯玉や寒の明け  
 公魚の釣れぬ時間の至福かな  
 雨粒を染むるほどなり花ミモザ  
 春光の届くや半跏思惟の像  
 島の風はらみ椿の咲き溢る  
 三寒の四温となるや明り窓  
 春シヨール旅の疲れがこぼれ落つ  
 四季のある国の由緒や節分会  
 色を食べ音を味はふ水菜かな  
 初場所や瓜実顔の厚化粧  
 立春の枕カバーの白さかな  
 雨しめやかに紅迫る青木の実  
 幻覚か隣に夫も日向ぼこ  
 春眠てふ贅沢愛づる自由人  
 手入れするひとなき庭の黄水仙  
 春シヨールたたみて受くる小盃  
 我に棲む鬼退散の豆を打つ  
 求人 の 貼り紙破る春一番

菅原卓郎  
 新 曆 文  
 菅原真理  
 阿部幸代  
 岡田宣子  
 小林京子  
 篠崎紀子  
 山岸久美子  
 元田亮一  
 池田珪子  
 吉川拓真  
 霜多光代  
 清水桂子  
 皆川更穂  
 丸屋詠子  
 森下山菜  
 本橋稀香  
 反町 修

| 水明例会案内 | 句会名  | 日 時       | 会 場                       | 指 導 者 | 幹 事               |
|--------|------|-----------|---------------------------|-------|-------------------|
|        | 第一例会 | 第1日曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10 F) | 山本鬼之介 | 茂小 木和京子<br>林 京子   |
|        | 第二例会 | 第3金曜・午後1時 | 本所ビッグシップ                  | 網野月を  | 山青 中みどり<br>木 鶴城   |
|        | 第三例会 | 第1月曜・午後1時 | 京橋区民会館                    | 山本鬼之介 | 五明 昇<br>曲 淵 徹 雄   |
|        | 第四例会 | 第1木曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10 F) | 山本鬼之介 | 石井 喜 恵<br>反 町 修   |
|        | 第五例会 | 第3火曜・午後1時 | 水明発行所                     | 山本鬼之介 | 梅澤 佐江<br>河野 はる み  |
|        | 若松例会 | 第1土曜・午後1時 | 京橋区民館                     | 山本鬼之介 | 正木 萬 蝶<br>石 田 慶 子 |
|        | 関西例会 | 第3日曜・午後1時 | 守口市文化(セ)                  | 大橋勉代  | 森本 早 苗            |

水 明 令和六年五月一日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第五号) 定価 一〇〇〇円